世田谷山観音寺特攻観音堂内の陸軍・海軍特攻平和観音像

特攻会報

平成30年11月

第１２２号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

第67回特攻平和観音年次法要・・・・・・・・編集長　金子　敬志　2
慰霊祭等参加報告
第35回宮崎特攻基地慰霊祭・・・・・・・評議員　原島　淳子　6
第四十八回哀惜の碑慰霊追悼式・・・・・評議員　宮本　雅史　8
海軍落下傘部隊慰霊祭・・・・・・・・・会員　衣笠　陽雄　10
憂国碑「錨地蔵尊」御霊祭・・・・・・・会員　衣笠　陽雄　12
十三塚原特別攻撃隊慰霊祭・・・・・・・評議員　倉形　桃代　15
会員投稿
台湾出身旧日本陸軍少年飛行兵（第３回）会員　呉　正男　18
同期生の絆・・・・・・・・・・・・評議員　深山　明敏　20
戦艦「陸奥」の眠る海・・・・・・・・会員　青木　和子　21
「梨　艦」・・・・・・・・・・・・・会員　青木　和子　23
航空「特別攻撃隊」戦果からの考察（前編）理事　水町　勝博　26
京城教育隊と渋谷健一区隊長・・・・・会員　大槻　健二　29
海上挺進隊・沖縄の戦い（続）・・・・会員　中溝　二郎　36
連載山ある記４・・・・・・・・・・・会員　池田　康博　50
インタビュー
中村五郎　最年少の生き残り特攻隊員・・編集長　金子　敬志　51
特攻文芸
短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・53
事務局からの報告等
重巡ルイスビル特攻についてのお問い合わせ・・・・・54
その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

挿絵提供　空自ＯＢ　宇山氏

第67回特攻平和観音年次法要

日　時　平成30年9月23日（土）
　　秋分の日　14時～15時30分
場　所　世田谷山観音寺・特攻観音堂
参列者　ご遺族28名、ご来賓38名　会員等
　　１５８名　合計２２４名
　　（この他にお布施を収められた方
　　１５５名）

一　式次第

司会　大穂　園井
梵鐘点打　３回　倉形　寛
国歌斉唱　トランペット　堀田　和夫
山主願文・宮司神儀（神仏習合）
　世田谷山観音寺山主　太田　賢照
　駒繋神社宮司　澤田　浩治
祭文奏上　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
　理事長　藤田　幸生
挨　拶　世田谷区長　保坂　展人
献　吟　一誠流吟詠　吉野　一心
　龍笛　逢坂　龍信
奉納献奏　甲飛喇叭隊第11分隊
　隊長　原　知崇
慰霊献歌　全員合唱
「同期の桜」「海ゆかば」
　トランペット　堀田　和夫
　堀田　ともみ
玉串奉奠　顕彰会会長、ご遺族及び
　ご来賓代表
焼　香　顕彰会会長、ご遺族及び
　ご来賓代表
　その後　参列者全員
式衆退堂
池前祭　山主読経及び宮司による
　祭詞奏上
式衆退場
直　会　15時30分～16時30分

特攻観音堂

二　概要

平成30年9月23日（日）秋分の日、第67回特攻平和観音年次法要が、世田谷山観音寺特攻観音堂において催行された。

ここ2回ほど天候に恵まれなかったが、今年は青空の下、雨の心配は不要の年次法要となった。

少し蒸し暑さを感じる中、定刻の10時30分には特攻隊戦没者慰霊顕彰会会員を主体とした支援要員が集合し、各部長の指示の下、済々と準備作業を行い、11時過ぎには作業を完了し、その後、支援要員は休息をとりながら昼食を取り、12時30分には所定の位置に着いて、来場者の受付、案内等の作業を開始した。

本年次法要は神仏習合で行われる。神仏習合形式は第56回からであり、今年で12回

献吟　吟　吉野　一心
　笛　逢坂　龍信

一誠隊　相川　清司　作

昭和19年12月21日　ミンドロ島付近で戦死
人知れず海の藻屑と消ゆるとも
　国の為には惜しまざりけり

神風特攻隊第18金剛隊　櫻井　幹夫　作

昭和20年1月5日　ルソン島西方で戦死
若桜南の空の雲染めて
　国の嵐に玉と砕けん

となりすっかり定着した感がする。

開始時刻が近づき、世田谷山観音寺山主及び駒繋神社宮司のお二方が特攻観音堂内の所定の位置に着席する頃には場内はほぼ満席となった。

定刻の14時、鐘楼に待機していた航空自衛官ＯＢの倉形寛会員の指揮のもと、梵鐘が３回点打されて法要が開始された。

式次第に従い、国歌斉唱、世田谷山観音寺山主　太田賢照和尚の願文、駒繋神社澤田浩治宮司による神事と続き、法要は滞々と執り行われていった。

定刻の15時30分に法要が終了し、その後、直会となった。青空の下、各テントでは久しぶりの再会や初対面のご挨拶をする方々など、和やかなうちに話が弾んでいたが、16時30分、時刻となったので、来年の再会を約して第67回特攻平和観音年次法要は散会となった。

山主願文奏上

国歌斉唱

世田谷区長挨拶

理事長祭文奏上

直会風景

「第67回特攻平和観音年次法要祭文」

今年もまた、この特攻隊全戦没者の年次法要が、平和、平穏の内に執り行えますことに感謝します。

今回は67回目、平成、最後の年次法要になります。あの戦から、はや既に、73年余が経過しました。

本日は、二つのことを、報告させて頂きます。

先ず、第一は、今年の春、この地で裏千家千玄室大宗匠による献茶が行われました。大宗匠は、御年95歳、元海軍航空特攻隊員であります。復員後、ご実家の裏千家茶道の奥義を窮められ、お茶の道の真髄「和敬静寂」「和の心」を、極められました。現在、そのお心を、「国連親善大使」として、全世界に広めておられます。

同期生ご英霊の皆様への気持ちは、如何ばかりであろうかと拝察させられました。ご存命の方は、既に九十歳半ばを過ぎておられ、各員それぞれに、戦後を祖国日本の発展と世界の平和に、尽力されてきておられます。

第二は、「あゝ特攻」勇士の像を、今春、念願の沖縄県護国神社に建立できたことです。多くの皆様が、沖縄に向け、特攻散華されておられます。今後、この像の御前で、皆様の慰霊祭が営まれていくことになりましょう。加治順人宮司様他、関係者の方々に深く感謝申し上げる次第です。

さて、皆様のお陰で、戦後、平和が続き、我が国は未曾有の発展を遂げてまいりました。昭和の時代から平成の時代に移り、来年からはまた、新しい時代が開かれようとしております。　このように、平和は続き、発展してまいりました。

しかしながら、その人類の営みの中で、富や資源の争奪、価値観の相違による争い事が、また、新に芽生えてきております。

人類の理想とする便利さや、楽に利を得ることの追求から、自己中心的な核家族化、少子高齢化が進んできております。その結果、日本の風土、古来の生き方から生まれ、受け継がれてきた様々な良き伝統文化が、大きく変わってきているように思われてなりません。

生活環境も、地球温暖化や生態系等に、大きな変化が、顕在化してきております。

従来の自然からの脅威は、不変であるようですが、核や交通、通信情報処理網等の発達は、これら自然の脅威にどう取り組むのかが、今や大きな課題になってきているように伺えます。

このように、私達人類が生きる世界の「空間軸」は、宇宙の彼方からサイバーの世界まで、無限に広がり、一方、「時間軸」は、交通や通信網の発達等から短縮されてきております。　しかしながら、心の世界を眺めたときは、精神面、宗教面、哲学面等では、むしろ、退歩の兆候さえ感じられる状況にあるのではないかと、憂うるところです。

このような中で、私達が皆様の慰霊顕彰に努める、その心は、

「ありがとうございます！」（謝意）、

「どうか、安らかにお眠りください！」（弔意）

「私も全力で、人類進歩平安の為に努力します！」（決意）

の、三つの「心」　であります。

高名なイギリスの哲学者、「アーノルド・トインビー」も、その著書の中で、人生で一番大切なものは、「愛と智と創造」であるという言葉を残しておられます。

私達は、今後、これらを胸にして、皆様方のご慰霊に尽くし、「平和・平穏・安全・発展」のために、努力していきたいと決意しております。

どうか、私達を見守り、お導き下さい。最後に今一度、皆様方に「謝意・弔意・決意」を捧げて、祭文を終わります。

ありがとうございました。

平成三十年九月二十三日

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長　藤田幸生

ご挨拶

世田谷区長の保坂展人です。

終戦から間もない昭和二十六年に睦賢和尚（ぼっけんおしょう）が独力で建立され、昭和五十九年には世田谷百景にも選定されたこの美しい世田谷山観音寺に、今年も命と平和の尊さを祈る日が廻ってまいりました。第六十七回特攻平和観音年次法要にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

戦後七十三年が経過するなか、ご遺族はもちろんのこと、戦争の記憶と平和の大切さをともすれば、見失いがちになる私たちにとって、こうして青春の途上に大海原に散った特攻隊員の皆様に思いを馳せることができる機会はとても大切な場です。同時に、この歴史を決して忘れてはいけない、との思いを一層強く抱いております。

幸い世田谷区には郷土を思い、その歴史を大切に残そうとしている方々がたくさんいらっしゃいます。先日、下北沢の歴史に詳しい方から一冊の本を紹介されました。

戦争末期、世田谷区からは長野県と新潟県に集団学童疎開が行われました。この本によると、松本市郊外の浅間温泉には現在の代沢小学校、東大原小学校、駒繋小学校など七校から二千五百名の児童が世田谷区を離れ、戦火を逃れて不慣れな疎開生活を送っていたということです。

疎開先には、松本空港からの出撃を前にした特攻隊員がいました。特攻のための爆弾を機体に取り付けるために来ていた特攻隊員と疎開児童たちは、交流のひと時を過ごしています。

丁寧な取材や、粘り強い調査によって、当時の隊員たちの本音や子どもたちとの交流のようすが明らかになっています。

隊員たちは、子どもたちと親しく交流しました。子どもたちは出撃を前に人形を作り、隊員に渡します。その人形を受け取り、愛機に結びつけた隊員たちは、出撃の前の壮行会でお別れの歌を次のように歌ったそうです。

一、広い飛行場に　黄昏（たそがれ）迫る
　今日の飛行も　無事済んで
　塵（ほこり）にまみれた　飛行服
　脱げば　かわいい皆さんの　お人形

戦時中、死地に向かう前のお別れの歌とは思えないような素朴でやさしい歌詞が胸に刺さります。そして、続く歌詞にも強く心を打たれます。

三、世界平和が　来ましたならば
　いとしなつかし　日の本へ
　帰りゃまっさき　浅間をめがけ
　わたしゃいきます　富貴（ふうき）の湯へ

富貴（ふうき）の湯とは、人形を贈った現在の東大原小学校の女子児童たちが疎開していた松本市の浅間温泉にある宿をさします。重い旅立ち前に、後世の平和を願い、戦争が終わったらまたここへ真っ先にかえって来たい、という歌だったのです。出撃したら帰らないはずの特攻隊員たちは子どもたちの前でこうして歌い、小学生たちはどんな思いで聴いていたのでしょうか。

学徒出陣で徴兵され、「お前たちは消耗品である」という訓示で始まる厳しい訓練を受けながら、やがて沖縄で戦死した当時二十三歳のある隊員は特攻隊員に選ばれる直前に次のような手記を残しています。

「人間は、人間がこの世を造った時以来、少しも進歩していないのだ」

「恐ろしきかな、浅ましきかな」

生と死の境で、すっきりと割り切れることのできない戦争の不条理を率直に吐露している姿に驚かされます。

また、特攻兵のほとんどが十代、二十代であったなか、三十二歳で出撃したある隊員は、三人の子どもと妻のいる家庭があったそうです。彼が出撃前に記した色紙には「人生の総決算何も謂う（いう）ことなし」とありました。あまりにも短いこの言葉に、残された家族への思いを抱きながら死地に赴くその胸中はいかばかりか、行間に無念さが宿っていると感じるのです。

冒頭、戦後七十三年が経過した、とお話

しさせていただきました。戦後に生まれた私の世代は親や先輩から直接戦争の話を聞きながら育ちましたが、今の子どもたちはもう私たちの孫の世代といってもいいようになってきました。

私は戦争の記憶と、平和の礎となった先人の思い、そして歴史の教訓をいかに後世に伝えるのか、日々思いを巡らせてまいりました。今ご紹介させていただいたような一人ひとりの貴重な声や経験を繰り返し伝えることこそが、間違いなく世代を超えて語り継がれることにつながると信じて疑いません。

世田谷区でも、昭和六十年に平和都市宣言を行い、平成二十七年には平和資料館を開館して戦争の悲惨さを伝える努力を続けておりますが、本日お集りの皆様もぜひ若い方々に平和の大切さを広く伝えていただきたいとお願いいたします。

改めて戦争の犠牲となられた方々への哀悼と、その後のわが国の復興を成し遂げた多くの先人への感謝、そして二度と戦争という惨禍を招くことのないよう永遠の平和を希求していく決意をお誓いして挨拶といたします。ありがとうございました。

平成三十年九月二十三日

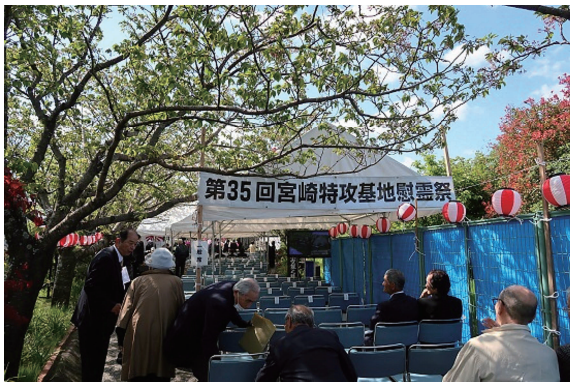
世田谷区長　保坂　展人

平成30年度第35回宮崎特攻基地慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

平成30年4月8日（日）宮崎県宮崎市宮崎ブーゲンビリア空港西に隣接して建立されている、宮崎特攻基地慰霊碑（鎮魂の碑）前に於いて斎行された、宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会（会長：後藤徹夫氏）主催の「第35回宮崎特攻基地慰霊祭」に、当顕彰会を代表し、参列させていただきました。

慰霊祭典は、式典開始のアナウンスの後、開会の辞に始まり、国歌斉唱・国旗掲揚と続き、航空自衛隊新田原基地らっぱ隊による吹奏・儀仗隊による弔銃斉射・黙祷と式次第に則り粛々と進められました。



宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会後藤徹夫委員長による追悼の辞では、「貴い命の上に平和がある。戦後70年が過ぎ、若者の命が散った事が忘れられてきている。いつかは宮崎特攻基地平和記念館を造って欲しい」と述べられました。

続く慰霊のことばでは、所々からすすり泣きの声が聞こえてきた。遺族代表、昭和17年8月8日第一次ソロモン海戦に22歳で出撃し散華された村永至氏（第1期甲種飛行豫科練習生）の甥村永浩太郎さんによる叔父上の遺書の一部紹介と当時の別れの様子をおりまぜた慰霊のことばでした。（ご本人の許可の下、最後に慰霊のことばと叔父上の写真を掲載させていただきます。）

続いて献花・献詠・赤江小学校卒業生代表2名による特攻基地に学んでと言う作文の朗読・祭電披露・赤江小学校生による「おぼろ月夜」・「ふるさと」の吹奏楽演奏と続き閉会の辞の後、一同礼で慰霊式典は終了いたしました。

青空の中、時折強風が吹く中で行われた慰霊祭の会場は、桜が満開の時にはさぞかし綺麗なのではないかと思われる宮崎空港に隣接している会場でした。空港に隣接している事もあり、時々ジェット音が聞こえてきます。さながら出撃する方々を見送っている様な想いにかられ、手をあわせておりました。

11時開始の1時間以上も前より集まっている方々はお仲間と写真を撮ったり・話をしたりして、懐かしい一時を過ごしていらっしゃいました。

この宮崎特攻基地慰霊祭は、小学生・中学生が参列し、また、市の職員の方々も関わって行われており、この様な慰霊祭は珍しくもあり、有難い事だと思いました。今後も長く続く事を願って止みません。小学生は6年生の時に、語り部の方から話を聞く機会を設けられており、語り部の方から学んだ事をきちんと受け止め、次の世代にも継承する事を考えていて、頼もしく思いました。

九州には沢山の特攻基地があります。名前の知られている所には多くの方々が訪れますが、ここ宮崎特攻基地の様に知名度は低くとも、飛び立って征った方々の多い基地もあります。この様な所をみつけ、どうか一人でも多くの方に手をあわせに行ってほしいと思います。また、私も行きたいと思っております。

最後に次の句を捧げます。

青空に　翼広げて飛ぶ鳥に
　飛び征く君の　姿かさなる

第35回宮崎特攻基地慰霊祭慰霊のことば

本日第35回宮崎特攻基地慰霊祭が執り行われるに当たり、遺族を代表して謹んで慰霊の言葉を申し上げます。

私は昭和14年9月27日に宮崎県都城市で生を受けた、村永浩太郎と申します。私より18歳上の叔父村永至は、第1期の甲種飛行豫科練習生で、卒業と同時に、昭和17年8月8日の第1次ソロモン海戦に出撃し、享年22歳で戦死しました。この叔父が出撃前に書いた遺書の一部を紹介させて頂きます。

「遺書」

御国に捧げしこの身は、死は厭わねど、何となく淋しい気がします。私にはもとより覚悟はできております。

母様達が涙を見せはしないかと、それだけが心残りでなりません。一度戦場に行きましたからには、銃後のお母様の御覚悟はしっかりしていると思います。もし、万一のことがありましても嬉しの涙は見せても、決して嘆きの涙は見せてはいけません。万歳を三唱して下されば、結構と存じます。

お母様へ　昭和17年6月15日
　至より

以上が出撃に際しての遺書の一部です。

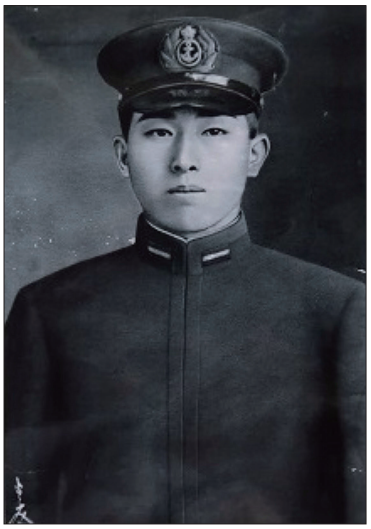
私は、当時3歳9か月位でしたが、叔父の姿を鮮明に覚えております。出撃する時、都城の生まれ育った家の上空に、地上すれすれに飛んで来て、何回も何回も旋回していました。地上では、母親（即ち私の祖母）が急いで長い竹竿の先に、藁のむしろを括り付けて、一生懸命振っておりました。それから叔父は機体を振りながら、南の空へ去って行きました。

叔父が亡くなった後、地域挙げての盛大な葬儀が行われました。列席の方々がお帰りになった後、広い部屋の仏壇の前に祖母は独りになり、ワンワン泣いておりました。この祖母の姿が脳裏に焼き付いていて、戦争の悲惨さを忘れることが出来ません。

今の日本は、平和で安心して生活出来ております。この平和になる道程を、この赤江特攻基地から出撃された方々を含め、多数の戦死された方々の御霊が見守って下さるはずだと思います。

犠牲になられた御霊に心からお悔やみ申し上げると共に、御遺族、御列席の皆様のご多幸を、心からお祈り申し上げて、遺族代表の言葉と致します。

平成30年4月8日
　遺族代表　村永浩太郎



制服姿の村永至１飛曹

三式陸上初歩練習機前の村永至１飛曹

第四十八回指宿海軍航空基地　哀惜の碑慰霊追悼式に参列して

評議員　宮本　雅史

平成三十年五月二十五日（金）、鹿児島県指宿市東方の指宿海軍航空基地哀惜の碑前広場で、「第四十八回指宿海軍航空基地哀惜の碑慰霊追悼式」（指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会主催）が行われた。

追悼式には遺族十人と元特攻隊員ら計約八十人が参列。顕彰会会長の豊留悦男・指宿市長と指宿在住の旧海軍出身者で組織された「旧指宿かもめ会」の吉田安宏代表の挨拶に続き、遺族らによる献花が行われた。また、献詠では、

『紅唇固く結んで　殉国を誓い　布に　母の名を書して我が腹に巻く』

『悠久の　大義　生きん　若桜　只勇み征く　沖縄の空』

『轟音直に翔る　沖縄の空　銷魂消ゆる処　残月在り』

と、神風特攻隊の松永二飛曹の和歌が高らかに詠い上げられた。

哀惜の碑は、昭和四十六年六月、生存者と指宿市民の浄財で、錦江湾を望む基地跡の高台に建立された。当初、「指宿かもめ会」が慰霊祭行っていたが、かもめ会の会員も高齢化が進み、徐々に参列できなくなったことから、平成二年四月、指宿市長を会長とする哀惜の碑顕彰会が設立され、以降、顕彰会が中心になって追悼式を行っている。

指宿市社会福祉協議会の冨山哲也事務局長によると、数年前までは二百人から三百人が参列、「帽振れ」のかけ声が飛んだこともあったが、高齢化などで年々減少してきたという。約二十八年間、追悼式に関与してきた冨山氏は「たとえ参列者の数が減っても、英霊を顕彰し、伝えるために続けていかなければならない」と話した。

×　×

追悼式当日、ＪＲ指宿駅前の土産店で、指宿海軍航空基地の話を聞こうとすると、返ってきた反応は「よくご存じですね。地元の住民でも海軍基地があったこと、特攻隊が出撃したことを知るものは少ない」。タクシーに乗り運転手に「哀惜の碑まで」と行き先を告げると「？？」。改めて「海軍の航空基地跡」と告げるとようやく通じた。

大東亜戦争末期、指宿に海軍航空基地があり、そこから多くの特攻機が出撃したことはあまり知られていないことに気づいた。指宿海軍航空基地は、水上機の基地として昭和十九年一月一日に開隊。第四五三海軍

航空隊（旧宿毛空を改編）の基地となり、同年十二月十五日、第九五一海軍航空隊に統合されると同隊の指宿派遣隊となった。零式水上偵察機や九四式水上偵察機、零式観測機を配備、索敵訓練や対潜哨戒、船団護衛等の任務に当たっていた。

ところが、昭和二十年四月一日、米軍が沖縄本島に上陸し、制海権と制空権が米軍の手に落ちると、指宿基地でも零式水偵や九四式水偵、零式観測機が特攻機に転用され、予備学生十三期生出身者と予備学生十四期生、予科練出身者らを中心に特攻隊が編成された。彼らの役目は、沖縄周辺海域の米軍艦船を撃滅して機動部隊の補給を絶つことだったとされる。結果、八十二人が出撃し散華した。

指宿基地は沖縄の米軍空母から発艦、九州に向かう米艦載機の通り道でもあった。そのため、米艦載機の機銃掃射を受け、百十人もの被害者も出している。

航空基地跡の哀惜の碑にはこうある。

『君は信じてくれるだろうか　この明るい穏やかな田良浜が　かつて太平洋戦の末期本土最南端の航空基地として　琉球弧の米艦隊に対決した日々のことを　拙劣の下駄ばき水上機に　爆弾と片道燃料を積み　見送る人とてないこの海から　萬感をこめて飛び立ち　遂に還らなかった若き特別攻撃隊員が　八十二人にも達したことを　併せて敵機迎撃によって果てた百有余人の基地隊員との鎮魂を祈ってここに碑を捧ぐ』

指宿海軍航空基地は、魚見岳の麓にあり、錦江湾にせり出している。戦後七十三年が経ち、基地跡には野球場や陸上競技場などの運動施設、さらに国民休暇村や市民会館などが整備され、慰霊公園として指宿市民に憩いの場を提供している。だが、当時は、哀惜の碑にあるように「見送る人とてない」環境だったのだろう。特攻隊の出撃というと、桜の花を振る地元住民に見送られて…という姿を想像するが、見送る人が少なく出撃した特攻隊員はどのような思いで出撃、沖縄海域に向かって操縦桿を握ったのだろうか。彼らの思いに馳せると切なさが沸き上がってくる。

以上

平成三十年度海軍落下傘部隊慰霊祭に参列して

会員　衣笠　陽雄

平成三十年五月二十七日、千葉県館山市安房神社において、平成三十年度第四十五回海軍落下傘部隊慰霊祭が実施された。特攻隊顕彰会を代表して参列したので報告する。

●慰霊祭の状況

ここ館山市は、旧海軍落下傘部隊発祥の地であり、現在も処々に落下傘部隊縁（ゆかり）の跡地が残されている。神社内には、立派な慰霊碑が建立（昭和四十八年）され、海軍落下傘関係者が健在の時期は盛大に慰霊祭が実施されたが、最近では一部のご遺族と関心を持たれる奉賛者の参列の下に安房神社の岡嶋宮司が毎年慰霊祭を主催され、小規模乍も営々と落下傘部隊の慰霊顕彰を継承されている。

今年の慰霊祭は、「海軍落下傘部隊慰霊碑」前に三十数名が参列し、岡嶋宮司を祭主に、開式の辞、修祓、降神の儀、神酒献饌、祭主祝詞奏上、玉串奉奠、神酒撤饌、昇神の儀、閉式の辞まで宮司以下神官、参列者により流れる様に整斉と神事が執り行われた。

その後、その場での直会の席で、岡嶋宮司は、「・・・本慰霊祭も今年で四十五回目になりますが、私はその内の三十八回取り行ってきました。三十八年前は六・七十名の同胞の方が集まり、靖国神社を参拝してから安房神社に来られ御英霊に対し慰霊の誠を奉げておられました。その方々が八十歳を過ぎ体調を崩されて来られなくなりました。その様な中で思うのは、この慰霊祭は忘れてはならないものであり、私は一生、安房神社がある限り顕彰をしていく積りです。また私は昨年八月十五日に靖国神社、今年の四月は千葉県護國神社慰霊祭に御奉仕しましたが参拝者の高齢化と減少、又都会と地方とは様子が変わっている事を知り今後千葉県挙げて英霊に対する顕彰活動を盛んにしたいと願っている所です・・・（要旨）」と今後の慰霊祭継続の決意を述べられた。

●所見

海軍は、昭和十五年十一月、ドイツの空挺部隊の成果から空挺部隊の導入を決定、横須賀海軍航空隊内に基幹要員二十六名を選抜して海軍初の落下傘部隊編成基幹要員として訓練を開始、その後要員は九十二名に増員され更に厳しい訓練と殉職者を出しつつも困難を乗り越え降下技術を習得し、昭和十六年六月に館山海軍砲術学校に移籍後更に増員、十一月、二個特別陸戦隊計千五百名の海軍落下傘部隊を極めて短期間の内に編制した。そして日本最初の落下傘部隊の作戦の機会は直ぐに与えられた。

開戦直後の昭和十七年一月十一日に第一特別陸戦隊を以てセレベス島メナドへ、同二月二十日に第三特別陸戦隊を以てチモール島クーパンに夫々戦闘降下・占領に成功し、山本聯合艦隊司令長官から感状を授与され初陣を飾ったのである。その後戦争末期まで落下傘降下作戦は叶わず、南洋サイパン、トラック、ナウル島に展開、地上作戦を実施、特にサイパンでは善戦の甲斐なく玉砕した。海軍落下傘部隊は、前記の様に開戦前急遽編成され、短時間の訓練で戦力化し、陸軍に先んじて降下作戦を敢行し成功した部隊でありその伝統と栄光は永遠に語り継がれるべきのものである。

戦後、海上自衛隊には陸戦隊又はそれに準ずる部隊は創設されず、海軍落下傘部隊の伝統継承は、途切れたが昭和四十八年建立された「海軍落下傘部隊慰霊碑」の慰霊祭への元海軍落下傘部隊隊員、御遺族、賛同関係者の参列により顕彰される様になった。しかし、その数も参加者の高齢化と共に減少し中心となるべきご遺族の活動も、

一部の方の活動を除き低調化して慰霊碑だけが残る最悪の状況も考えられなくもない。一方、陸上自衛隊では陸軍落下傘（挺進）部隊同様の「第一空挺団」が創設され、現在緊急即動部隊としての地位を確立し国民から期待される存在となっている。又旧陸軍落下傘（挺進）部隊の慰霊顕彰活動も積極的に実施して伝統の継承に大いに寄与している。

この様な対照的な旧陸海軍の戦後の慰霊顕彰状況は、旧海軍の生存隊員やご遺族に危機感があるのは当然である。今回も参加された、御尊父の遺志を継ぎ、「海軍落下傘部隊を語り継ぐ会」代表として積極的に活動されている町田珠美様は、現状に危機感を持たれておられたが状況好転の兆しが見られた。今回陸上自衛隊第一空挺団のＯＢの組織である空挺同志会の千葉県支部の長瀬支部長以下会員16名が、慰霊祭に参加したのであった。「落下傘の絆」で毎年参列している同志会員はいるが、この様に多くの会員が組織的に参加したのは恐らく初めてであろうと思われる。彼らは自他ともに「同志」と目され、将来に亘り海軍落下傘部隊の顕彰活動を組織的に担任継続できる適任の「後輩」ではないかと思われる。当日も町田様に対し積極的に協力する旨を述べられ、町田様も感激されておられた。かつて陸海軍は仲が悪かった。落下傘部隊も特にメナド・パレンバン報道事案以降は深刻だった様だが、現在の世代にはそんなトラウマも支障もない。同じ日本人として、落下傘に命を託して訓練し、戦った事から生じる「落下傘の絆」は陸軍・海軍の垣根を外し自然と仲間意識と団結出来る無形の要因なのである。

本慰霊祭の今迄の継続は安房神社岡嶋宮司の御奉仕に依る所極めて大であるが、今後は、長瀬千葉県支部長以下の同志会員が「落下傘の絆」を以て宮司・ご遺族を助け、海軍落下傘部隊慰霊祭の継続と発展が期待できると思う。しかし慰霊祭の中心は何と言ってもご遺族・ご家族であると思う。慰霊祭の賛同者を数だけ集めても「心なきお祭」になる恐れもある。何百年も経過した慰霊祭ではなく、まだ生存戦友や近親者等関係者が多数居られるホットな慰霊祭では「慰霊」と「顕彰」の両方が必要だと思う。特に慰霊の気持ちの強いご遺族関係者の参列は特に貴重であることは、特攻隊慰霊顕彰会で全国の慰霊祭に参加し肌で感じている。今後、特攻顕彰会としても継続的に本慰霊祭に参列支援していきたいと考えている所である。

海軍落下傘部隊慰霊碑（昭和48年建立）（H30.5.27・安房神社）

平成三十年度憂国碑「錨地蔵尊」御霊祭に参列して

会員　衣笠陽雄

平成三十年七月十六日（海の日）、山形県湯殿山において、「平成三十年度第二十一回憂国碑『錨地蔵尊』御霊祭」が実施された。特攻顕彰会を代表して参列したので報告する。

一　御霊祭の状況

慰霊祭は、古来信仰をあつめている出羽三山の一つ湯殿山の頂近くの湯殿山神社本宮から少し下った所、湯殿山参籠処・大鳥居横の仙人沢霊場の回天戦没者等を祭った憂国碑「錨地蔵尊」前に於いて、十時より地元の関係者等三十数名の参列を得て実施された。祭りは、前後段に区分され、前段は神仏習合の慰霊祭、後段は海軍式の慰霊祭であり、異種の形式に区分して同時に実施するのは他の慰霊祭では余り見かけない珍しいお祭りであった。前段は、湯殿山神社森井神官及び羽黒修験神林千祥氏（錨地蔵尊奉讃会会長）による神仏習合による儀式、後段は、錨地蔵尊奉讃会主催による海軍・海上自衛隊の現職・ＯＢ等の支援を得て旧海軍方式による儀式であった。

前段は、森井神官による修祓、祭詞奏上、神林氏による般若心経の読経等、全員の玉串奉奠、撤饌で儀式は終了した。引き続き後段は大瀧成紀奉讃会事務局長の司会により整斉と執り行われた。

平成30年度憂国碑「錨地蔵尊」御霊祭（湯殿山/仙人沢霊場）

当初参列者の紹介と式次第についての説明の後、「総員集合」、「開式の辞」で式が開始され、「拝礼」、「軍艦旗掲揚」、「国歌斉唱」、「黙祷」、「回天追悼の歌」の説明と全員による斉唱がラッパ・サイドパイプ・テープの活用により効果的・スムーズに進んだ。次いで全員の「献花」、神林会長音頭による「献杯」、慰霊碑への「献水」が実施された。献水の水は毎年鈴木海洋少年団長が日本海から採取し献水しているという。その後「拝礼」、「閉式の辞」、「別れ」で、厳粛かつ滞りなく終了した。記念撮影の後、新参拝者挨拶があり、私も顕彰会活動の現状について一言述べさせて頂いた。その後、田麦荘において直会が実施された。

二　所　見

●慰霊碑について

慰霊碑の「憂国碑　錨地蔵尊」は一般には余り聞きなれない名前であるが、平成九年十月十日建立された碑文には「・・・大東亜戦争末期全国から多くの青少年が志願転戦しその多くが挺身散華された。その勇魂は、船の安全を保つ『錨』の様に平和を支える礎になった。・・・私達は三百十万と云われる戦没者の御霊が湯殿山の御神湯に浄められ再び生れ出、平和の御先導を御勤めくださるよう、御霊代として、神潮特別攻撃隊の遺言集「その若き命惜しまず」、ウルシー島の珊瑚、沖縄激戦地の御霊石を安置、『錨地蔵尊』を建立し、永遠の世界平和を祈念するものであります。・・」とあり、建立の趣旨・名前の由来が述べてある。慰霊対象を散華された青少年英霊特に回天戦没者を対象としている事や回天隊員が抱く錨の碑の意味が覗える。

憂国碑「錨地蔵尊」（湯殿山仙人沢）

最近の戦没者の慰霊祭では、慰霊主対象を恰も大東亜戦争全戦没者にする様な慰霊祭が増加している気がする。それはそれで理解できるが、慰霊祭の「慰霊」という大目的は、その下位概念の「慰霊」即ち「慰霊（安らかにお眠り下さいと永遠の安寧を祈る事）」と「戦没者の遺徳を国民に伝承する事」の二点を実施する事で目的を達成出来るのであり、何れも大事な事である。

しかし安寧の心だけでは、遺徳の伝承の効果はないのではないだろうか。戦没者の具体的行動の背景にある「精神の伝承」の具体化とその行動こそ現実面では重要であり、慰霊祭は正にそのためにあるのではないのだろうか。私は特攻顕彰会の一員として参列時にはその慰霊祭が特攻戦没者をどの様にみているのか、特に祭詞、挨拶、式典実施要領等の特攻隊戦没者の具体的顕彰要領等に注目して自分の顕彰の考え方・行動の在り方の参考にしている。今後増加するであろう公的機関による慰霊祭では特に「精神の伝承」についての方策を考慮されて実施して頂きたいと願うものである。

前段の神仏習合儀式で、修験神林会長の般若心経の読経は独特の口調・調子で発声され感動的な読経であった。神道家系！の私には当初内容が分からず、後で神林会長に確認した所「あれを知らぬのか？」と呆れかえられ、特攻顕彰会の名を汚したかもしれないと反省した次第である。今後観音寺の月例法要では、たまには恵淳和尚に羽黒修験流読経をお願いしようかとも思ったことであった。

即身佛修行之地(後方は即身佛擬似像展示)（仙人沢）

●仙人沢と錨地蔵尊

錨地蔵尊が、何故仙人沢に建立されたのかは当初の疑問であった。事前に調査し現地で色々見聞したが凡人には当然ながら理解には程遠いものがあるが、以下の事から碑建立者の思いは多少は分かった様な気がした。資料によれば、「・・・一千四百有余年という他に例を見ない伝統的な出羽三山信仰世界即ち出羽三山の羽黒山・月山・湯殿山の三山を巡る事は死と再生を辿る『生まれかわりの旅』と言われてきた。それは羽黒山で現世利益の御神徳に与り、月山の大神の下で死後の体験をし、慈悲深い湯殿の大神より、新しい生命を賜って、再生すると考えられている。特に湯殿山での修業は神仏と一体になり即身成仏を得る事が出来るとされた。現在庄内地方にある「即身佛」六体は皆仙人沢で五穀を絶ち十穀を絶って即身佛になられた。その最初の即身佛は、高野山金剛峰寺を開かれ、最後は自ら即身佛となられた弘法大師（空海）であると言われている。前記六体は名前に何れも「海」の文字を付けているのが証拠と言われる。空海上人も湯殿山で修行をされていたのである。・・・」。また湯殿山では過去・現在・未来が混然一体、「三世一貫」「三関三度」「擬死再生」により御霊の魂は再生が可能という。私には真の意味は不明であるが千年も継続しているという事実が何よりも「生死の深い意味」を物語っており、修験者には理解できるのであろう。三島由紀夫も出羽三山に於いて輪廻思想を学んだのであろうか興味ある所である。

即身佛の擬似像(仙人沢)

この様な霊地に錨地蔵尊を建立したのは単なる宗教的な思惑からではなく、国と家族のために自ら命を捧げた若者にこの世（ここ湯殿山）に帰って我々を先導して欲しいとの純粋な気持ちがあるからであろうし、現世の人々を奮起させる狙いもあるのであろう。今回の慰霊祭では特に輪廻について考えされられた貴重な体験であった。

●錨地蔵尊奉讃会について

今回、御霊祭を主宰した「錨地蔵尊奉讃会」会長に、羽黒修験の神林千祥氏が着任された。神林氏は鎌倉幕府から続く、「長圓坊」という羽黒山麓修験の由緒ある家柄の出で、現在も三山大愛教会管長として日々修練に励んでおられるという。大滝事務局長の話では、会長は、三十年以上前から肉類を一切絶っており、霊力があり高邁な精神世界に身を置いて人物洞察力もあるという素晴らしい方で、英霊の慰霊顕彰にとってまたとない人物と思われる。

御霊祭の一切を一人で準備・実施されておられ大瀧事務局長と神林氏が中心となって、今後益々成果を挙げられる事を確信し帰路についた。

（参考）現在継続している回天関係慰霊祭一覧

NO.	1	2	3	4	5
①慰霊祭名 ②慰霊祭実施時期 ③慰霊祭実施場所	①回天特別攻撃隊・定例慰霊祭 ②毎年四月二五日一〇三〇 ③大分県速見郡日出町住吉神社内	①憂国碑・錨地蔵尊御霊祭 ②毎年七月海の日 ③山形県湯殿山千人沢霊場	①楠公回天祭 ②毎年九月第二日曜一一〇〇 ③岐阜県下呂信貴山山王坊 王回天楠公社社頭	①潜水艦殉国碑慰霊祭 ②毎年十月二十日一三〇〇 ③東京都渋谷区東郷神社	①回天烈士並に回天搭載 戦没潜水乗員追悼式 ②毎年十一月第二日曜一一〇〇 ③山口県周南市大津島 回天碑前
④慰霊碑名 ⑤慰霊碑建立場所 ⑥慰霊碑建立時期	④（慰霊碑なし） ⑤＊＊＊＊＊＊ ⑥＊＊＊＊＊＊＊	④「憂国碑錨地蔵尊」 ⑤湯殿山仙人沢霊場 ⑥平成九年十月十日	④「回天」碑（昭39年） ⑤回天楠公社横 ⑥（回天楠公社創建昭和 三九年九月二七日）	④「潜水艦殉国碑」 ⑤東郷神社境内	④「回天」碑 ⑤大津島回天記念館前 ⑥昭和三六年三月二六日 （再建碑）
⑦慰霊祭主催者 ⑧連絡先 ⑨その他	⑦住吉神社	⑦錨地蔵尊奉讃会 ⑧奉讃会大瀧事務局長 0234-42-0695	⑦回天楠公社奉賛会	⑦東郷神社	⑦回天顕彰会 ⑧事務局 0834-21-0075 ⑨昭和四三年十一月 回天記念館開館

※神潮特別攻撃隊戦没者之英霊鎮魂祭は、毎年八月十五日に実施していたが「満願成就」により鎮魂祭は終了している。又「神潮特別攻撃隊菊水隊英霊位慰霊塔」は月山山頂に設置されている。

※慰霊祭実施等についての右記以外の情報ある方は、事務局までご連絡頂ければ幸いです。

第20回　国分第二基地十三塚原特別攻撃隊慰霊祭

評議員　倉形桃代

今年の夏は猛暑続きで、息をするのも苦しい程であった。毎年８月15日終戦の日は、照りつける太陽と蝉時雨の中で迎える印象があるが、今年は台風15号にみまわれた九州・鹿児島の地で迎えた。

チェコ村 慰霊祭会場入口

昨年５月に当顕彰会の代表随行として知覧での慰霊祭に参列した際、空港近くにあるチェコ村「バレル・バレー・プラハ＆GEN」（鹿児島県霧島市溝辺町）の敷地内にある「十三塚原特別攻撃隊慰霊感謝の碑」に参拝させて頂いたご縁もあり（会報第１17号に記事掲載）、今年で第20回目となる「国分第二基地十三塚原特別攻撃隊慰霊祭」に、会の代表として参列させて頂いた。当日は台風による暴風雨が心配されたが、主催者である霧島高原ビール（株）会長の山元正博氏の「慰霊祭の日に雨が降った事はありませんから大丈夫でしょう」とのお言葉通り、朝降っていた小雨も慰霊祭が始まる11時には殆ど上がっていた。慰霊碑前の祭壇には、沢山の花や果物・お酒が供えられている。神事は、加治木島津家第13代当主・精矛（くわしほこ）神社宮司　島津義秀氏により粛々と執り行われた。

花に囲まれた慰霊碑

【式次第】

・国歌斉唱
・拝礼
・修祓の儀
・降神・献饌の儀
・祝詞奏上
・玉串奉奠
　霧島高原ビール（株）代表取締役会長
　山元正博氏
　遺族代表　中島富士子氏
　来賓代表　前・霧島市長　前田終止氏
・撤饌・昇神の儀
・鎮魂の鐘　一分間の黙祷
・遺書奉読
　霧島市日当山小学校６年　二宮陵介君
　遺書：神風特別攻撃隊第３八幡護皇隊
　　伊藤英次少尉（予備学生14期／東京都出身）
・奉納演武：薩摩の秘剣　野太刀　示顕流
・献花（参列者全員）
・主催者挨拶
　霧島高原ビール（株）代表取締役会長
　山元正博氏

・来賓代表挨拶
前・霧島市長　前田終止氏
・遺族代表挨拶
中島富士子氏（永尾博中尉・妹）
廣嶋　文武氏（廣嶋忠夫少尉・弟）

慰霊祭の最中、時折雨が強く降った瞬間もあったが、山元会長のお言葉通り、最後まで影響を受ける事なく終わった。山元会長のご挨拶の中に、慰霊碑の地下にある第二国分基地の地下施設を一部整備して、今後公開したいというお話があった。

慰霊祭が終わった後、山元会長が「崖の上からですが見てみますか？」と、当会の会員でもある廣嶋氏と私を、現場が見える場所まで連れて行って下さった。雨が降った後で泥濘んだ斜面を「滑らないように気をつけて」と、御年91歳になられた廣嶋氏の手をとり下りて行かれた姿に、まるで親を労る息子のような優しさを感じて心が温かくなった。

木の間に地下施設の一部が見える

その後、会社が経営する「源気ファーム」で生産されたそば粉を使った十割蕎麦をはじめ、おにぎりや野菜の煮しめ等、心の籠もった美味しい食事を戴いた。参列者は約50名弱との事だったが、気持ちを同じくされる地元の方が多く和気藹々とした良いお祀りであった。社員の方々も一丸となって、心を込めて準備や参列者のお世話をされていた。この地で勤務されている方々は、嘗て第二国分基地だった事をよく認識されていると感じた。

「早いもので弊社の敷地内に多くの防空壕があった事がご縁で20年前から社内慰霊祭を始め、17年前には多くの方々に志を頂き10トンもある慰霊碑を建立し、さらにご遺族、一般の方々にもご参列いただくようになり、毎年８月15日に十三塚原特別攻撃隊慰霊祭を行い続けております。」（慰霊祭の案内状より抜粋）

個人で20年の長きにわたり英霊の慰霊顕彰を続けていらっしゃる山元会長の真心と熱意に、心からの敬意と感謝を捧げる。

会食中に、山元会長の同士でもある天台宗　大雄山南泉院（鹿児島市花尾町）住職・宮下亮善氏による「征韓論の歌」の一部が披露された。今年は西南之役１４０年・明治維新１５０年目の年であり、ＮＨＫ大河ドラマで西郷隆盛の生涯を描く「西郷どん」が放映中で、色々な意味で話題になっており、歴史検証の機会にもなっている。

鹿児島の方々の西郷隆盛への敬愛の念はとても強く深い。慰霊祭では参列者に山元会長が出版された”『本当の征韓論』を語ろう～『征韓論』は『親韓論』だった～”（発行所：ＮＰＯ・ふるさと日本プロジェクト）が配られた。48ページの漫画冊子であるが、活字が苦手な世代の人々にも理解し易い内容となっている。

廣嶋氏が、帰る前にどうしても鹿児島市内にある豫科練の碑を再訪したいと仰るので、皆様とゆっくりお話する間もなくチェコ村を後にした。空港まで送って頂いた車の窓から、沢山のひまわりが咲いているのが見えた。その畑もチェコ村の敷地であった。まだ雨雲が切れ切れにかかる夏空に向かって伸びたひまわりが風に揺れる様子は、まるで私達を見送る沢山の英霊の「帽振れ」のようだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

前日移動で、特攻隊員ゆかりの地を訪ねた。戦勝祈願をした鹿児島神宮と、外出の

際によく立ち寄ったという日当山温泉の大正旅館（後「ホテル洗心閣」昨年閉館）があった場所である。一年早ければ、旅館のただずまいにその面影を偲ぶ事が出来たかもしれないと残念に思ったが、池のある立派な日本庭園は、ほぼそのまま残っていた。旅館跡地には「日当山西郷どん村」（霧島市隼人町）という観光施設が建設中で、西郷隆盛がよく訪れ宿泊したという龍宝家の屋敷が復元されている。庭園には、当時龍宝家にあったイヌマキの樹があり、西郷さんが馬を繋いだという伝承が残っている。

特攻隊員が参拝した鹿児島神宮の拝殿

兄ゆかりの地を訪ねて

会員　廣嶋文武

ここ2、3年前から会報「特攻」に十三塚原神風特別攻撃隊慰霊祭に参加された役員の報告記事が掲載されるようになった。第二国分基地といえば、私の兄・神風特別攻撃隊第四御楯隊・海軍少尉　廣嶋忠夫（昭和20年8月9日　犬吠崎東方海上の機動部隊に突入戦死／甲飛12期・福岡県出身）に関わる2枚の写真がある。

ある日、茨城県の百里原基地からではなく、鹿児島県の加治木局消印のハガキが届き、昭和20年6月2日に、早速福岡から面会に行った両親と写した写真、これが兄のたった一つの形見になってしまった。この一葉の写真を小生は肌身離さず、何処に行くにも胸ポケットに入れ、弘法大師ではないが「同行二人」の宝である。更に嘗ての戦友から戴いた松林前の27名の搭乗員の写真が写された場所が、ここ第二国分基地ではないかと思っていた。小生は確か4回はこの鹿児島空港に来たが、嘗ての基地、あの松林は何処だったのか、一度その場所へ行きたいと思っていたが、今回の慰霊祭参加で実現することが出来た。

平成30年8月15日。戦後73年にもなるこの日、台風15号が午前3時頃隣県の宮崎に上陸したが、午前11時より台風一過の空の下、霧島高原ビール会長山元正博様主催の慰霊祭が、いとも厳粛に執り行われた。遺族代表のご挨拶の次に、司会の重森氏から思いがけないご指名を頂き、前記の写真の事と、この第二国分基地から再び百里基地へと移動する時の一通のハガキ（送られて来たハガキの中で、唯一「さようなら」と書かれていた）を朗読させてもらった。「悠久の大義に殉ず」そして8月9日金華山沖にて散華したと。

慰霊祭後、山元会長様は倉形さんと小生を連れて山を下り、檜林・竹林に囲まれた嘗ての防空壕の入り口がある崖下を眺められる場所に連れて行って下さいました。

小生は倉形さんに同行をお願いして、鹿児島市内鴨池にある、憧れた七つ釦・豫科練の「貴様と俺の碑」がある鹿児島海軍航空隊の跡地へ向かった。碑には季節の花やガマの穂が供えられていた。小生も慰霊祭後に分けて戴いた菊の花を添えた。「おーい、又逢いに来たぞ」と頭を下げた。碑には、同航空隊出身の名誉ある戦死者の名前が県別

に刻まれた銘板があり「福岡県・広島忠夫」の名を確認できた。

偶然、午前の慰霊祭の前に、この碑の建立に携わられた鹿児島県石材工業連合会長の前迫進様にお目にかかれ、建立の経緯を聞く事が出来たので、この碑の重要さを覚えた。

かねがね、ある方には申し上げていたが、当会の「特別攻撃隊全史」には何故かこの碑が掲載されていないことを残念に思っていた。この機に全史への掲載を改めて懇望します。

「貴様と俺の碑」

台湾出身旧日本陸軍少年飛行兵について（第３回）

陸軍特別幹部候補生１期生機上通信士

会員　呉　正男

台湾出身の陸軍少年飛行兵について２回に亘り記述した。

台湾少飛会解散前年の台湾少飛会事務局長発信の通知文及び２００４年度会務報告があるので少し略記して最終回としたい。

『先輩・知友の皆様

前略、高齢者である我々の長年に亘る切なる要望がやっと叶えられる筈の最後の一歩手前で滔々躓きました。残念・無念の想いを抱いて落ち込んでいるのは私達だけでしょうか。

註　２００４年12月11日の地方選挙（市長、県長、鎮長、地方議員）を指す。

必勝の信念を抱いて立法委員選に臨んだ台湾勢は奴等の息の根を止めてやる意気込みで頑張った心算でしたが、矢張り「甘すぎたなぁー」との一言に尽きるとしか考えられません。

今次の身に沁みる厳しい痛烈な教訓を肝に銘じ、台湾人特有の強靭なる生命力を十分に発揮して、お互い切磋琢磨を惜しまず、明るい素晴らしい台湾の将来に向かって、この余生を捧げる覚悟を新たに致す次第であります。

幸いにして陳総統、李前総統が提出された諸々の議題は台湾人を名乗る大衆にとっては「そうするしかない」、と目覚めて多数の共識を得る日も遠くないと信じています。

ご尊家ご一同様の益々のご清栄とご発展を祈願致し、以上愚見を申し上げます。

台湾少飛会事務局長　邱　其垚

尚、少飛の皆様へは同封にて会員名簿を送付致します。』

『台湾少飛会２００４年度会務報告（平成16年12月28日）

①２月６日　去年12月10日開催の第４回全国大会での決済事項及び委細につき報告を作製、発信した。

②２月28日　李登輝前総統発起の「人間の鎖で台湾を護る」行事では、会長始め全会員が全国各地で参加、総勢１２０万人以上に愛国の志士が集う未曽有の盛大なる行事となり、台湾を護る誓いを新たにした。

③３月20日　祖国台湾に捧げる最後の務めだと励んだ努力が実を結び、陳水扁氏が連・宗を倒して再選・・・・・天祐台湾。

④５月14日　日本全国少飛会岡崎会長を訪れ、黄翠昌君（大津17期）綴る「あゝ空

征かば」二冊を航空自衛隊入間基地に在る航空記念館に蔵書として寄贈するよう取り計らって貰いました。

⑤５月16日　横浜在住の呉正男氏（特幹１期）と同道で「あけぼの」会門脇会長宅を訪れ、会長の台湾に寄せるご厚情に深謝の意を述べてきました。

尚、去る２月29日大阪護国神社で斎行の「旧台湾同胞に捧げる慰霊と感謝」の行事及び高金素梅等が大阪地裁に提訴の靖国訴訟の経緯を綴る「祖国はるか」⑫は既に九月中に出版されています。

⑥５月22日　知覧特攻会館を訪れ、当直責任者参事松元淳郎氏と会談、台湾出身特攻隊員故泉川正宏命（劉志宏）故芦原徹命（盧健珍）に関する情報を交換致しました。尚松元参事のご案内で館内展示の邱錦春氏（特幹１期）が特攻の戦友に宛てた書簡を拝閲しました。

⑦９月23日　第７回幹事会をアンバサダーホテル二階で開催、席上に来台中の「あけぼの」会門脇会長をお招きし、約一時間に亘り懇談を重ねました。又幹事会では10月７日発信の如く、全国大会開催の日時・場所を決定、更に会員の高齢化に鑑み、解散の方向へと運営するよう方針を定めました。（２０１７年８月15日解散をした。）

⑧11月10日　終戦直後から二・二八事件後迄、元日本軍人・軍属出身者が、陳儀に騙されて、國府軍の応募し、國・共内戦に強制参戦、餘多の台湾兵が戦場の露と消えました。何時・何処で戦死されたのかも殆んど記録に残されていません。「台湾無名戦士紀念碑」の除幕式と慰霊祭にあたり本会からは私と蔡萬湖氏（所澤16期）郭徳発氏（特幹４期）と横浜在住の呉正男氏（特幹一期）が参列致し、追悼の誠を捧げてきました。台湾に生まれた台湾人としての宿命を深く脳裏に刻み、感無量の一日を共にしました。

台湾無名戦士紀念碑

⑨11月15日：昭和20年４月12日、郭徳発氏（特幹４期）が茨城県西筑波飛行場で勤務中、軍機の墜落事故を目撃しました。搭乗員は全員即死、その遺体の収容・搬送作業に参加しました。後で判明したことは、何と知人の郭任水様（特幹一期生、台北中学校４年生から入隊）がその一員だったのです。「私も目撃しました。飛行第62戦隊（飛龍）戦隊長機の墜落でした。」

呉正男氏は遺族を探し出し、日本への招待旅行を実行しようと考えて、私は故郭任水命の家族探しを申し受けました。調査の結果、故郭任水命は中学一年から三年生まで、全学年約１８０名前後の生徒の中で学業成績がずっと第一番と最優等の記録の持主であったのです。数知れずのご遺族の方々に思いを馳せるとき、台湾の将来が連想されて、斯かる悲劇が降り掛からないよう努力すべきとの信念を新たにする次第です。

⑩12月11日　台湾勢が敗北を喫しました。残念・無念の至りです。

⑪今年度散り去りき同期の櫻に追悼の誠を捧げ、ご冥福をお祈り致します。

１　故陳益順様（大津17期）３月11日歿

２　故詹俊郁様（奈良17期）８月１日歿

以上』

同期生の絆

評議員　深山　明敏

「英霊にこたえる会」が毎年発行している「靖國カレンダー」の今年の5・6月用ページには、裏千家前家元・千玄室大宗匠が参加された旧鹿屋航空基地の特別攻撃隊戦没者慰霊塔における慰霊祭（平成27年5月31日）の写真が使用され、記事には昭和20年4月29日、同基地から沖縄に向け零戦爆装出撃し、沖縄島北端東方海域において特攻・散華された森丘哲四郎命（23歳、海軍大尉に2階級特進）の『手記』の一部などが掲載されている。

森丘哲四郎命は、昭和18年12月、学徒出陣で舞鶴海兵団に入隊した際に、千玄室大宗匠と同じ分隊に配属され、海軍第14期飛行予備学生として士官教育を受けた土浦海軍航空隊においても、同じ分隊で起居を共にした同期生である。

「千ちゃん、俺は生きて還ったら、お茶の稽古をしたい。よろしく頼むよ。」と、はにかみながら私に語った素敵な笑顔が忘れられないと、千大宗匠は想い出をお書きになっておられる。

その後の赴任地・北鮮の元山基地では、戦闘機訓練隊における「戦闘特別攻撃法」の厳しい訓練の余暇を活用して、茶道にも勤しみ、「自然なるままに、角なきを尊ぶ茶道」に魅かれるようになっていった。

府内散策の際に購入した楽浪焼の茶碗を愛で、遺された茶器の木箱蓋裏には自筆の辞世である

「ちよろづの　神の持たせる命なり　砕きて守れ　大君と國」

が記されていた。

また、彼が飛行作業に自信を失った頃、すべてが行き詰まった感じで頭が重く、苦しみながらも、ある日、お茶の席に参列すると、彼のお点前を見てよく笑う同席の女学生がおり、その時、「救われました。飽和状態の搭乗員の苦悶の生活からやっと脱出でき、今、この茶室で助けられたのです。」と先生に感謝の気持ちを伝え、帰隊したというエピソードも手記には記述されている。

この時の森丘海軍少尉の心境は、千玄室大宗匠が説いていらっしゃる「安穏を得るに大切な心の在り方、即ち信と敬と寛容の茶道の本質」を体得できたということではないだろうかと推察する次第である。

ところで、去る4月29日、奇しくも森丘哲四郎命の七四回忌の命日に、千玄室大宗匠による特攻隊全戦没者の御霊に対する献茶式が、東京都世田谷区の世田谷山観音寺特攻観音堂において厳粛に執り行われた。十死零生の体当たり攻撃に活路を求めようとして殉じられた英霊にとって、苦楽を共にした同期生・戦友たちからの誠意溢れる鎮魂・追悼の祈りほど嬉しいものはないであろう。

戦後生まれが8割を超えるようになった我が国では、戦争犠牲者に対する慰霊顕彰の心の風化は避けられないところであり、靖國神社の新宮司に着任された小堀宮司が、いみじくもおっしゃったように、まさに戦後の雲散霧消の懸念は拭いきれず、青少年の健全育成事業重視という新宮司のお考えも喫緊の課題と感じさせられる。

大東亜戦争において、米国側は神道を熱狂的な日本人の愛国主義のバックボーンとみなし、神風特攻隊の必死の攻撃は、天皇を神とする宗教的狂信に基づいて実施されたと考えていた。

そこで、昭和20年12月15日に、ＧＨＱ（連合国軍総司令部）は「神道指令」を日本政府に対して発令し、国家（神社）神道の政治的影響力の排除を命じ、信教の自由の確立と軍国主義の排除、政教完全分離などを求めた。「大東亜戦争」や「八紘一宇」の用語の使用禁止、並びに国家神道、軍国主義や過激な国家主義を連想するとされる用語の使用もこれによって禁止された。要するに、この指令により、神道に加え、皇室の伝統そして歴史教育も全面的に否定され、その影響力は今日に至るまで依然とし

て続いていると言える。

特攻隊員は、崇高なる軍人精神の下、悠久の大義に徹し、忠誠心と訓練成果とをもって、敵艦・敵機を必沈・必墜、皇軍の精華の発揮を期待できる士気旺盛な志願した若者たちが選ばれていたが、正規の軍隊編制ではなく、厳密な意味ではその隊長には完全な統率権がなかった。

従って、海軍の最初の特攻隊である神風特別攻撃隊「敷島隊」の発進を見送った昭和19年10月25日、第1航空艦隊司令長官・大西瀧次郎海軍中将は、「特攻は、統率の外道だ」と語ったと伝えられており、一方、陸軍では沖縄戦を担当する第6航空軍司令官・菅原道大陸軍中将が、「特攻に統率なし」と語っておられるところに特攻の特異性があったのではないであろうか。

いずれにしましても、後に続く者を信じて従容として国のために散華された多くの若者の御霊に、慰霊と感謝の誠を捧げ、そして曽野綾子氏が随筆の中で「生涯の終わりに望む言葉」として求めておられるように、「ミッション・コンプリート（任務完了）」と崇敬の祈りを捧げることが、今を生きる私たちとして果たすべき役割であろうと思う昨今である。

戦艦「陸奥」の眠る海

会員　青木　和子

１９４３年（昭和18年）６月８日柱島泊地

早朝から降っていた霧雨がやんだ。

連合艦隊旗艦の艦歴を持つ戦艦「陸奥」は、第一艦隊旗艦を姉妹艦「長門」へ交代する為、航海科員が錨地変更の準備をしていた。

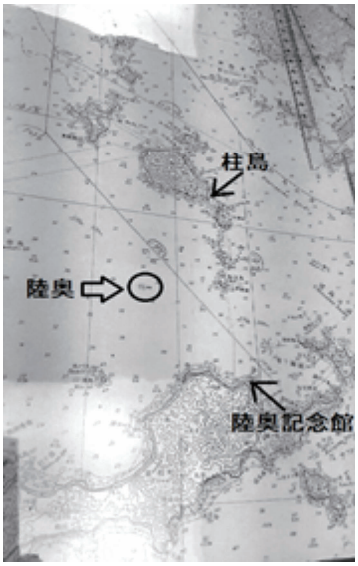
「長門」が旗艦ブイに到着するのは午後1時、「陸奥」はそれまでに錨地を移動する必要がある。旗艦ブイと呉鎮守府は直通電話線が繋がっている為、旗艦交代＝錨地変更なのだ。

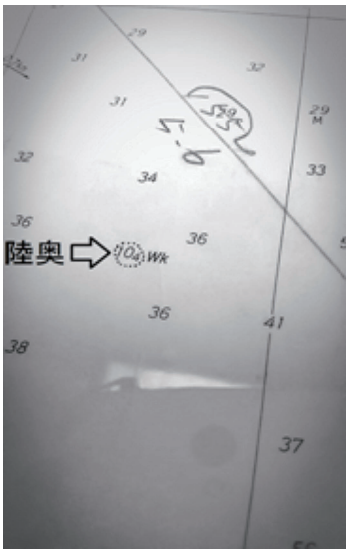
午前9時に呉軍港を出発した「長門」は正午には「陸奥」の1．５Km前方まできていた。

泊地には戦艦「扶桑」、重巡「最上」、軽巡「大淀」、「龍田」、駆逐艦「若月」、「玉波」。無風で濃霧が立ち込めており、視界は1km 離れている「扶桑」が微かに見える程度だった。

正午を10分程まわった頃、突如「陸奥」は三～四番砲塔付近から煙を噴き上げ大爆発を起こした。瞬時に船体は真っ二つに折れ、艦前部が右舷に傾斜したかと見るや僅か2分で沈没、泊地には艦尾のみが残り、一面に重油の膜が浮いた。各艦はこれを米潜水艦の雷撃によるものと判断、対潜水艦配備を行い即座に救助艇を発進させた。

しかし乗員１４７４人中救助されたのはわずか３５３人でしかなかった。３６０トンの三番砲塔が艦橋と同じ高さまで吹き飛んだという目撃証言や死者のほとんどは溺死でなく爆死だった事実が爆発の凄まじさを裏付けた。





「陸奥」の艦尾部は約４時間後（日没後）に沈没、「扶桑」の第一報「陸奥爆沈ス。一二一五」以降「陸奥」に関する一切の事項につき箝口令が敷かれた。

陸奥記念館　陸奥之碑

爆発の原因は諸説あり未だ解明されてはいないが、即座に沈没した原因について資料を基に私見にて考察する。

軍艦は戦闘による損傷の復原性も考慮して造られている。船体の切断箇所は第三砲塔附近、当時「陸奥」は満載に近い状態であった為、浮力・予備浮力の合計は１万数千トン。これに対し第三砲塔周辺の区画及び機械室の全部・前方の第三～六缶室が浸水したとしても、爆発による浸水量は約７千トンでしかなく、これで「陸奥」が沈むことはない。

また「陸奥」のＧＭ値は約２．４３ｍ。右舷機械室、中央機械室が浸水し右舷満水であったとしても、浸水による転覆モーメントは１万トン・ｍ程度で、船体傾斜は約６度に過ぎず、昭和９年の友鶴事件以降、全ての戦艦は60度以上の復元力にて設計されている為、やはり転覆することはない。

柱島　戦艦陸奥英霊之墓

だが「陸奥」は転覆した。なぜなのか。

魚雷命中時に高い水柱が上がるのは、爆発力のかなりの部分が空中に逃げていることを示すもので、爆発による圧力は常に弱い方へと向かい、当然水中よりは空中へ向かう。

「陸奥」の火薬庫は、上部・周囲共完全に装甲されており、構造物として一番弱いのは船底部である。

従って爆風で砲塔が飛ばされる前に船底が破壊され、膨大な圧力が海底へと向かう。爆沈現場の水深は約42ｍであり、満載時の「陸奥」の喫水は10ｍ程であることから、船底を破った圧力波が海底で反射し、下から「陸奥」を突き上げて転覆させたのではないか。そして転覆により無傷の区画でも浸水が進み最終的に全没してしまったと考えられる。

「陸奥」のサルベージは１９７０年（昭和45年）に始まり、数年かけて75％を引き上げて終わった。目に見えぬ絆なのか「陸奥」は爆沈後28年を経て、姉妹艦と同名の起重機船「長門」によって引き揚げられている。

ちなみに姉妹艦「長門」はビキニ環礁核実験の標的艦となり艦命を終えた。

１９４６年（昭和21年）７月25日、「長門」は艦首部に穴を開けられ、艦体に機雷を装着された状態で爆心地から９００～１０００ｍに配置。

原爆が投下され、「長門」は右舷側に５度の傾斜を生じて浸水するも沈没は免れた。しかし４日後の朝、洋上不在となる。おそらく浸水が進んで沈没したのであろう。

引き揚げられた「陸奥」の砲塔や主錨、遺品等は周防大島町の陸奥記念館はじめ各地に展示されている。

また、船体に使用されていた鉄材は「陸奥鉄」と呼ばれ、現在放射線精密測定機材の遮蔽材として珍重されている。

現代の製鉄は、溶鉱炉内の耐火煉瓦に含

まれる放射性物質コバルト60が混入する。
しかし戦前に製鉄された陸奥の鉄材は製鉄法の違いから、このような放射性物質を含んでおらず、かつ海中にあったことで戦後大気中で行われた各種核実験の影響も少ない、今や非常に珍しい「きれいな鉄」なのだ。

一昨年9月、周防大島町の陸奥記念館より爆沈の海を眺め、今年3月には柱島に渡り同じ海を見る。透き通って寄せる波からは重油の海など想像できない。

陸奥は静かにこの海に眠っている。

爆沈点を望む

柱島より爆沈の海を見る

「梨　艦」

会員　青木　和子

ある日、ふと見つけた不思議な写真。それは駆逐艦「梨」の引き揚げ写真だった。

この1枚の写真をきっかけに山口県の離島・平郡島への旅が始まる。

引揚中の「梨」

3月20朝、風が強い。柳井港へ続く岸壁は砂が舞い上がっていた。

平郡島への唯一の交通機関、フェリー「へぐり」の出港まで10分を切っている。急いでチケットを買い1日わずか2往復の「へぐり」に乗り込むと間をおかず船は柳井

港を後にした。

駆逐艦「梨」は橘型の10番艦として川崎重工業神戸艦船工場で１９４４年９月１日に起工、翌１９４５年１月17日に進水、３月15日に就役した。橘型とは戦時急造型駆逐艦である松型よりさらに構造簡略化を進め、建造期間の短縮を計った駆逐艦である。「梨20」は燃料事情の悪化・乗組員の錬度不足等から３月発動の天一号作戦（「大和」最後の戦いとなった）への参加を中止、４月初旬に柳井市南方の八島泊地に移動し、主に停泊訓練を行っていた。５月下旬「海上挺進部隊」の所属艦となり呉軍港等の対空戦闘に従事、７月には呉にて改装工事を受け、回天の搭載・運用能力が追加された。以後「梨」は回天基地の所在する山口県平生に移動し、回天の母艦として周防灘で各種訓練に従事することとなる。

終戦までひと月を切った7月28日、「梨」は平郡島北岸沖に停泊中、米空母機動部隊艦載機の空襲を受ける。早朝から午後にかけて、グラマＦ６Ｆ戦闘機による複数回の攻撃で艦の各所にロケット弾を被弾、午後に入り艦後部の１２．７センチ高射砲と爆雷を置いた架台間の甲板に貫通被弾、爆発の為船体は大きく損傷し小規模の火災が発生した。爆雷が引火し紫色の炎を吹き出し始め室内が真っ暗になる。発電機室がやられたのだ。これにより艦内での電信業務は不能となった。付近に積んだ石油缶等が誘爆によりポンポンと発火し、海中に落下。機械室の火災で大量の煙と蒸気が立ち昇る。後部が徐々に沈下すると共に次第に右への傾斜が増大、総員退艦が令せられた。「梨」は右に横倒し浸水により沈没した。午後２時であった。艦長は最後まで艦に残り、艦が棒立ちになる寸前に飛び込んだ。確認された戦死者は38名、行方不明者を含む犠牲者は60名以上となった。

駆逐艦「梨」は竣工からわずか４ヶ月でその生命を終えた。

「梨」慰霊碑

「梨」の戦没者慰霊碑は沈没地点を望む平群島北岸にある。海を行くこと１時間40分、「へぐり」は平郡島東港に入港した。翌日は雨予報、海を渡って風はますます強くなっている。春とは思えない耳がちぎれそうな寒さ。遮るものは何一つなく風の直撃を受けながら、北岸堤防道路を歩くこと70分。ついに「梨」の慰霊碑の前に立つ。

梨艦ノ記（駆逐艦「梨」慰霊碑より）

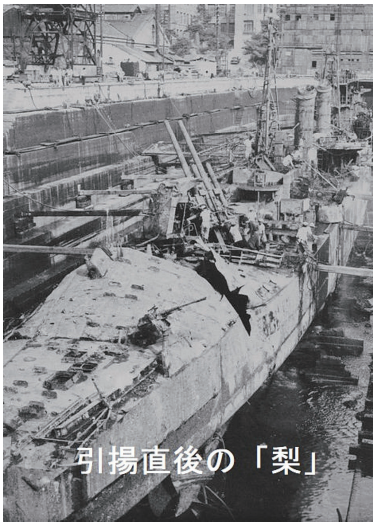
昭和二十年三月神戸川崎造船所デ竣工シ本土防衛ニソノ機能ヲ発揮シタ

然ルニ同年七月二十八日　長深山沖ノ海戦デ敵機延べ百五十機ノ攻撃ヲ受ケ奮戦スルモ遂ニ爆沈　ソノ栄光ノ幕ヲ閉ジタ

ココニ海底深ク眠ル御霊ヲ祀ルト共ニ恒久ノ平和ヲ念ジテ建立ス

最後の戦闘を「梨」は停泊のまま迎え、抜錨することはなかった。当時は動くか否かは難しい問題だった。動いている目標は上空からすぐ分かる、つまり敵機を誘引するからじっとしていた方がいいという考えもあった。西方に避退した僚艦「萩」は残り、「梨」は沈んだ。即ち停泊は間違っていた、というのは結果論である。停泊していて岸が近かった為即座に救助艇が来て生存者が多かった、というのもまた事実なのだ。

運命の日はやってきた。１９４５年９月21日、沈没後放置されていた駆逐艦「梨」は、廃鉄鋼材としての利用を目的に浮揚された。艦尾の高角砲や機銃は当時のまま上空を指向している。10年近く海中にあったものの、調査の結果状態は良好であった。防衛庁は


引揚直後の「梨」

再就役させる計画を立て、修理改装を施す。１９５６年５月31日、ついに大日本帝国海軍 駆逐艦「梨」は海上自衛隊警備艦「わかば」として就役し、さらに１９５８年、改めて兵装を装備、乙型警備艦「ＤＥ２６１ わかば」として再就役した。かくして「わかば」は海上自衛隊が保有した史上唯一の旧海軍の戦闘艦艇となったのである。「わかば」という名には戦争の焦土から再び立ち上がろうとする日本と、帝国海軍から日本の守りを受け継いだ海上自衛隊への思いが込められていたようだ。特筆すべき「わかば」の任務には１９６２年の三宅島噴火時の避難民輸送任務、１９６８年実用実験隊に編入、ソナー・魚雷等新兵器の試験艦任務がある。

１９７１年３月31日、ついに「わかば」は除籍となり、江田島にて解体処分となった。「梨」として４ヶ月、「わかば」として、15年。日本海軍と海上自衛隊、両方に在籍した軍艦の人生はこれで終わりとなった。

海上自衛隊時代の「梨」

「梨」の沈んだ海は伊予灘の平郡島と掛津島の間、陸からわずか数百メートルの地点である。その場所を目の当たりにして、あまりの近さに言葉を失う。

引き揚げられて「梨」はもうここにはいない。

だが、この海に眠る人はいるのだ。

駆逐艦「梨」は今、前部高角砲と魚雷発射管のみになり、江田島の海上自衛隊第１術科学校に展示保存されている。

「梨」沈没海域を望む

航空「特別攻撃隊」戦果からの考察（前編）

理事　水町　勝博

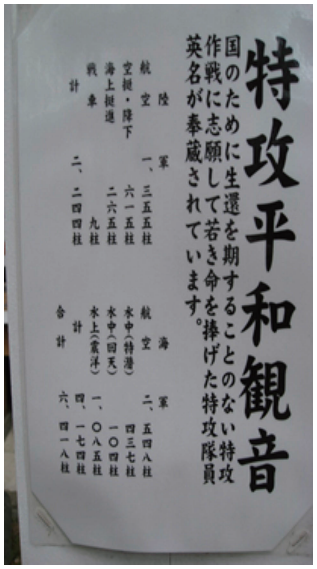
●　特別攻撃［特攻］（出撃命令に特攻明記）の戦没者は六、四一八名です。戦艦大和など海軍・陸軍特攻出撃が明記されていない準特攻は除いています。

世田谷山観音寺の特攻観音堂前の銘板には特攻平和観音に特攻隊員の英名が奉蔵されていると掲示されています。

陸軍は、航空一、三五五名、空挺降下六一五名、海上挺進隊二六五名、戦車九名　計　二、二四四名、

海軍は、航空二、五四八名、水中（特殊潜航艇）四三七名、水上（震洋）一、〇八五名、水中（回天）一〇四名、

計　四、一七四名



航空特攻について考察します。

太平洋戦争は総力戦でした。国家各分野の総力を動員する戦争、その一角機動力発揮の空母を失い、航空機による航空優勢が確保できない。軍の中央では、我が国の航空不振を第一線将兵の生命によって補う戦法を、天皇の名において命令することは適当でないとして実施した。「必死必勝」の特攻戦法、その戦果＝米軍の損害が気にかかります。航空攻撃力を特攻に頼った二つの戦い、比島・レイテ島戦と沖縄戦における米軍記録の艦船被害を比較してみます。

先ず比島・レイテ戦では昭和十九年十月十八日捷一号作戦を発動した。大本営はこの決戦において終戦を導入すべく勝利を期待した。レイテ島に上陸しようとする米機動艦隊・輸送船団に対して、海軍に続き陸軍も初めて特攻隊を編成し戦った。海軍二〇二機、陸軍一四八機、計三五〇機が突入した。

海軍は神風特攻隊の戦闘経過を及川軍令部総長が奏上「そのような事までせねば成らなかったのか、しかしよくやった」特攻を始めてお聞きになられた。そして特攻隊戦果の報道に国内は歓喜した。陸軍も特攻隊「富嶽隊」「万朶隊」が出撃、梅津参謀総長が陛下に報告、「ご果報になる」

米軍は七十二隻（軍用船のみ借上げ民間船舶は含まず）の損害、特攻機一機当たりの戦果＝損害確率は二〇、五％、しかし戦いは戦勝にならず、米軍は十二月下旬レイテ島に上陸した。特攻が通常作戦化、特別＝異常が常態化、報道も特攻の記事で埋まった。

一方米国の損害は大きく、特攻攻撃は脅威となり、敵機による被害極限は急務となった。対策を立て次の作戦翌二十年三月二十五日、米軍は沖縄慶良間湾に侵攻を開始した。連合艦隊は天一号作戦を三月二十五日発動、海軍は「菊水作戦（一次四月六日～十次六月二十二日）」陸軍は「航空総攻撃（一次四月六日～九次五月二十八日）」陸軍の第六航空軍は海軍の連合艦隊司令長官のもとで統合して戦った。十次航空総攻撃は六月一日陸軍単独、六月二十三日沖縄守備隊司令官牛島中将は摩文仁の丘で自決し戦いは終わった。

沖縄戦における特攻の突入機は陸軍機八〇五機、海軍機は七九一機、計一、五九六機、一方米軍記録の艦船損害一六四隻特攻機一機当たりの与えた損害確率は一〇、二％であり、半減した。米軍の特攻対策効果は十分発揮された。

●　米軍はレイテ戦で脅威となった航空特攻対策を、続く沖縄戦には次の四つの対策を立てた。

戦闘機による迎撃、対空砲火、レーダーピケットライン、回避行動の四点です。

航空特攻は陸海軍合せて三、九〇三名特攻戦没者全体の61％弱を占め、主体である

一　戦闘機による迎撃

特攻機は対空機関銃など搭載武器を外し、替わりに多くの爆薬の爆弾を積み、大きな破壊力を以て敵艦に突入するのが任務で、途中敵戦闘機に遭遇したら、回避も攻撃もできず撃墜されてしまうのみ、ましてレーダーに探知され待ち受け迎撃されたらなすすべはありません。

昭和十九年十月特攻開始以前の米空母一隻の搭載機は戦闘機三九機、爆撃機三六機、雷撃機二十機、計九五機でした。

昭和二十年三月沖縄戦開始時の米空母の搭載機は戦闘機三八機、爆撃機十五機、雷撃機十五機＋戦闘機三六機（追加）計一〇四機、沖縄戦では爆撃・雷撃機を減らし、戦闘機Ｆ４Ｕ（コルセア）を増加しました。コルセアはカミカゼキラーと呼ばれた。

Ｆ４Ｕコルセア

個対個の強さで勝ることは士気を高め作戦を優位にする。

二　対空火器

戦艦に搭載されている対空火器は砲と銃があります。

対空砲は５インチ通常弾、５インチＶＴ弾、３インチ通常弾の三種が使われ、機銃は40㎜ボフォース、28㎜機銃、20㎜機銃、１２．７㎜機銃があり使用弾数と撃墜機数で、弾数が少なく撃墜しているのは、５インチＶＴ弾と40㎜ボフォースでした。通常攻撃機であれば追い払うか攻撃を失敗させればよいが、特攻機は突入を図って来るため、確実に撃墜させなければならないこと、高角砲の射程では有効な打撃を与えられずボフォースの射程内の突入をしばしば許していた。沖縄戦には改善できず戦後の改修となった。現在我が国の巡視船に装備している船もある。

４０ｍｍボフォース砲

三、レーダーピケットライン

沖縄戦では本島残波岬の中心より七十～百㎞遠距離ブロック、十五～五十㎞近距離ブロックに駆逐艦及び補助艦を円状に配置、沖縄から離れた空母群も同様に配置、戦闘指揮所ＣＩＣから戦闘機を迎撃に向かわせる。そして戦艦・巡洋艦・ピケット艦を進入海域に集中、対空砲火を濃密にした。之こそ味方の中心を守る組織的防空戦闘であり、個に立ち向かうにはこれしかなかった。

海軍特攻隊の攻撃法は、レーダーの探知を避け目標に接近するため、島の山影から、海面スレスレの死角から接近、レーダーにより識別困難な米軍機の後方から紛れて接近、目視されにくい雲に隠れて侵入又は太陽の方向から侵入、複数機で接近、囮機が対空砲火や迎撃機を引き付けている間他機が突入を図る。ピケットライン分断の為レーダーピケット艦を目標として、船首又は船尾迄超低高度で接近、突入直前に急上昇し目標の艦橋に突入を図る。特攻勇士はこの突入状況を念頭にした。その証拠は米軍が解析した体当たり戦法攻撃法と同一であった。これは組織と個の戦いであった。

四、回避行動

特攻を受けた艦の行動をオペレーショ

ンリサーチし、大型艦は回避運動をとった方が突入を受けにくい、小型艦は回避運動をとった方が突入を受けやすい、これは対空射撃と相関していた。

攻撃機の阻止には回避運動よりも対空砲火による方が効果が大きい

大型艦は回避運動中も艦が安定しているため対空砲火に与える影響が小さい、小型艦は動揺が激しく射撃精度に影響する。

（一）大型艦は回避運動推奨、小型艦は回避運動を避ける。

（二）特攻機が高空から攻撃した場合艦腹を、低空から攻撃した場合は艦首・艦尾を向け衝突面を最小にする。

●　この様に特攻対策を取ったうえで、米軍の動きは特攻攻撃に効果があり損害を半減させたことが伺えた。

昭和二十年四月一日沖縄本島中部・西部に米軍上陸開始以降、日本軍は特攻攻撃を開始、四月六日海軍菊水一号・陸軍第一次航空総攻撃、四月十日菊水二号・第二次航空総攻撃の後、同月中旬陸軍第六航空軍（福岡）は米軍の無線を傍受、「特攻による艦船の大損害に耐えず撤退を考慮している」ことを知る。（ピケット艦の駆逐艦16隻撃沈・18隻再起不能の大損害か？）好機とみて第六航空軍は参謀長井戸田少将を大本営に派遣して、義烈空挺隊を使用して北・中飛行場を攻撃する義号作戦使用を上申、然し大本営は成功を危ぶみ、許可をしなかった。

一か月後の五月十一日第七次航空総攻撃、戦果の低下、意見具申、五月十六日義号作戦認可、五月二十八日第八次航空総攻撃は義号作戦と連携し特攻を集中した。

敵の状況に味方の方策がすれ違ってしまった瞬間があった。仮説だが義号作戦を意見具申の通り実施していたら、捷一号作戦で成し得なかった終戦は、この沖縄戦の特攻を以て導入できたかもしれない、特攻勇士の一念が叶う時があったのではないか、とその可能性を思った。

特攻作戦を行った現場はどうであったか、小生の父は第六航空軍の主任作戦参謀で赴任した。「特攻」記事特攻平和観音像の造立趣旨に父のことに触れ、その存在を知った知覧平和会館の専門官八巻氏は防衛研修所の資料から父の日誌を探し、そのコピーを頂いた。沖縄戦の開始直後の陸軍特攻部隊の中間司令部の様子が読めた。先ず特攻隊の隊編成がとれていない。特攻機が揃わない、多分機体の故障もあっただろう、差し出す操縦者の部隊長の決断の賛成か反対があったのだろうか、逐次集合する隊の状態が、何処に何機到着・・と書かれ、戦史記録には集合完了すると命令が下達されていた。作戦開始時は、混乱していて司令部・部隊、前線の知覧・都城・大刀洗との戦果・隊長との記述は少なく、距離感を感じた。㊙情報等は日誌に無く、もちろん前述の義烈空挺隊のことは書かれてない。そして四月下旬には日記は途切れ、本人の人事記録にはその後航空本部付になり本土決戦準備が推測された。戦後父は、元六航軍司令官菅原中将の下で特攻勇士慰霊のための「陸軍の特攻平和観音像」（世田谷山観音寺・知覧観音堂奉納の二体）購入資金調達等に戦後混乱の中、旧陸軍航空関係者を回り奔走していた。

大本営の方針と現場の判断に齟齬の多かった本大戦の戦局、情報量・質により判断が異なったのだろう又現場の実態・実情を示す特攻隊員の記録は真実である事を証す。之を正すには戦局が余りにも広かった、大組織の中央は陸・海軍共に官僚的になり、統帥権の長には夫々が都合の良い報告をした。誤りは訂正されない。両軍は統合し、良きも悪しきも正しい報告をすべきで、総力戦への対応の在り方を読者はどう思われたでしょうか。（完）　後編は「航空戦力に影響与えたモノを考察し、特攻をせざるを得なかった」ことを述べてみます。

京城教育隊と渋谷健一区隊長

大槻　健二

はじめに

第六十四振武隊長として特攻出撃した渋谷健一大尉の事を調べて何年経っただろうか。私も気が付けば彼の年齢と同じになっていた。細々と断片的な資料や証言を纏める作業を行ってきたが、素人の腕では中々形にならない。長文でもあるので、現在講演会等で精力的に活動を行われている、上野辰熊氏の証言を入れた、大刀洗飛行学校京城教育隊時代の事を短編にして掲載をお願いすることにした。長い間教育の場にあった、渋谷健一氏の人柄を偲んで頂けると幸いである。

渋谷氏にとって朝鮮京城勤務の一年は、三年弱の短い結婚生活の中で最後の妻子との同居であった事も付け加えておく。

※　※

少年飛行兵第十五期生（乙）教育

昭和十九年四月～七月末

渋谷氏の教え子である第六十六戦隊の上野辰熊元兵長は、筆者に送って下さった自伝に以下のように綴っている。

※ここではカッコ内の文は上野氏より直接伺った話の中から、本文を補足する目的で挿入したものである。

「私、上野辰熊が大刀洗陸軍飛行学校に少年飛行兵十五期乙生徒として甘木生徒隊十中隊の基本課程を終わり。少年飛行兵十五期に採用、陸軍上等兵として十中隊の半数九十六名が新設の京城教育隊に配属された。此処で第一区隊に配属され、この時の区隊長が渋谷健一中尉であった。（中略）此の京城での九五式中間練習機で、各操縦班が、助教と生徒六名が交代で操縦を習得するのであるが、飛行場場周離着陸の基本を習得後単独飛行を許可され、二、三度単独飛行で飛べるようになった頃、急性気管支炎で医務室に二、三日入室していると、（軍医の指示で区隊長を呼び、）軍医と渋谷区隊長が話し合いの上、龍山の陸軍病院に入院した方が早く治るのではと、（車を用意してくれて、）緊急入院させられた。（区隊長は、准尉待遇だった婦長に掛け合って、個室を用意してもらった。また、若いからと言って他の兵隊のように雑用などをさせない様に頼んでくれた。）約半月、四ヶ月の基本教育では大きいマイナスである。しかし渋谷区隊長は途中でも見舞いに来られ、「あせるな」「じっくり治してからでも間に合うから」と励まされた。退院後は素早く予備機を使用して二、三未だ単独飛行が出来ない者と特別班を作り、自ら同乗飛行（教官前席・生徒後席）をされ、他の倍の時間を使って下さった。一度単独飛行をして居たので三日目位だったか、「も一度単独で飛んで来い」と言われ、勇気を出して飛んでみた、その後皆さんは既に特殊飛行を習得しているので、これに追いつくまで乗って戴き編隊飛行が始まる前に元の操縦班に返されたのである。

四ヶ月の基本操縦教育も終わり、大刀飛校も卒業となる。次の実用機の教育に向け戦闘、軽爆、重爆、偵察と各分科の配属が発表された。再教育も有ると聞いて居た。私は良くて再教育、悪ければ操縦淘汰、転科も覚悟していた。しかし軽爆分科、機種襲撃機で平壌教育隊と決まる。吃驚もしたが、喜びも一入であった。（「特別班」の他の二名は操縦淘汰で機上射手の道に進むことになった。）

渋谷区隊長に呼ばれ、『君は決して他の者に遅れてはいない、時間も充分に足りている。自信を持って行きなさい』と諭され感謝の念で一杯である。（特別班の訓練は一日に二度実施されることもあった。飛行時間が足りているか気がかりであったが、卒業基準の三十時間に達する様に調整してもらっていた事に気付いた。）あの温情ある計らいは今でも忘れることが出来ない。」ここで引用を終る。

戦隊に配属され万世に在った上野氏は、この渋谷区隊長の出撃を、彼とは知らぬまま万世で見送ることとなる。この話はまた別の機会にまとめたいと思う。

特別幹部候補生第一期生教育
昭和十九年八月～昭和二十年三月

京城教育隊では、少年飛行兵教育を終えた翌月、すぐに次の教育が始まった。対象は特幹一期生であった。

ここに、一綴りの自筆の文集がある。渋谷氏（中尉）が京城教育隊からの転出時、部下の准尉一名、教え子の特別幹部候補生十二名から送られたものである。文中から引き続き第一区隊長であった事が判る。

日々の言動も織り込まれ、彼の教育者としての人柄を知る良き資料となると思われるため、学生十一名と部下一名の文を全文掲載する。

※

渋谷中尉　吉川英夫

懐かしき区隊長殿

思ひ起せば去年の八月より今日迄満五ヶ月間の長きに亘り、心魂を傾注して教育御指導して下さった。

我等候補生は区隊長殿の熱を慈愛の光により今日までの精神技倆に上達する事が出来ました。我等一同は慈父と仰ぎ慕つて来ました。併し区隊長の教へを厳守せず今日迄色々と御迷惑をおかけした事をお詫びします。一度是なりと信ぜられたならば飽迄やり遂げられた。又何時も明るく朗らかで日本晴れの様に晴々として居られた区隊長殿。満五ヶ月の間色々と思い出になる事があります。総督官邸訪問、若鷲の家でのピンポン、戦斗教練等々を。

又一生忘れられないのは八組の時単独着陸で誘導標に体当りして愛機を破損した時、優しくなだめて下さった。

「他の者が敵機を一機落すなら三、四機は撃墜する迄は死ねない身となつたのだ」と。

敵空母、敵機を叩きつける迄は絶対に死ねません。新区隊長の教へを厳守し、必勝の精神と必勝の技量と、竹を割った様な性格の操縦者となり区隊長殿の御期待に副ふ事を誓ひます。後日お会する日の出来る事を楽しみにしてゐます。書きたい事は山程ありますが之で失礼します。区隊長殿の御健闘をお祈りします。

※

渋谷中尉殿　不破良一

父トモ尊敬シタル渋谷中尉殿ト御別レスルハ真ニ偲ブニ偲ビ難キ所ナリ

思ヘバ昨年七月末当隊ニ入校以来、飛行機ノ如何ナルモノヤモ知ラヌ自分等ヲ現在ニテハヨチくナガラモ単独ニテ操縦出来得ル様ニナリ又其の他内務ニ学実科ニ総ユル点ニ就キ最大ノ努力御指導下サレ、其ノ御恩タルヤ実ニ極マリ無シ。

此ノ上ハ益々渋谷中尉殿ノ御期待ニ副フヘク必勝ノ精神ト必勝ノ技倆トヲ練磨シ空中勤務者トシテ恥ヂザル軍人ニナルベク最大ノ努力ヲスベキナリ

イザ御別レニ当リテハ一言モ言ヒ得ズ唯感涙ニムセビ任務完遂ノ為　努力ノ二字ヲ誓ヒ、最後ニ御健康ヲ御祈リシ筆ヲ止メン

※

渋谷中尉殿　瀧川榮太郎

思ヘバ一昨年八月憧レノ大空ヘノ高鳴ル足音高ク当派遣隊ノ門ヲ入リシ時ヨリ今日マデ操縦ニ内務ニアラユル方面ニ慈父ノ如キ愛情ヲ以テ今日マデ御教訓下サレシ区隊長殿ノ其ノ感化実ニ偉大ナルモノアリ今突然ニ別レルニ至ル、誠ニ感慨無量

過グル日ノ訓練ニ慈愛ノ鞭ヲ受ケルコト幾度ゾ人一倍ノ心配ヲ掛ケシ吾、特ニ単独ニテ宙返実施ニ当リ実施要領命ニ反セシ件ニテ受ケシアノ時ノ注意飛行停止ヲ命ゼラレテ昨年吾愈々戦場ニ於テ不覚ヲ取リ又完全ニ任務遂行セシメンガ為ニ我ガ将来ヲ思ヘバコソ涙ヲ振ヒ以テ愛ノ鞭ヲ打ツアノ日ノ御教訓今ニシテ肝ニ銘ジ心魂ニ徹シ又其ノ鴻大ナル思ヤリニ只々感涙ヲ禁ジ得ン別レシ後今日マデノ御教訓ヲ厳守　教官方ノ教訓ニ従ヒ一日モ早ク精錬ナル操縦者トナリ必ズ此ノ鴻恩ニ酬イント決意シ覚悟スルノミ

※

渋谷中尉殿　宮島義夫

我レ等ノ区隊長渋谷中尉殿今般大命ニ依リ転属サレントス、顧レバ我レ等昨年八月京城教育隊ニ転属シテ今迄六ヶ月ノ長キ間

慈愛ト熱意ヲ以ツテ御教訓下サレ無事今日ニ至レルハ此レ一重ニ区隊長殿ノ賜モノト深ク感謝ニ耐ヘザル処ナリ憧レノ教育隊ニ来タ時、区隊長週番士官デ兵舎ノ舎前ニ於イテ、気合ノ込ツタ声デ「決シテ楽ナ教育ハセン」ト云ハレタ事今モ尚深頭ニ刻マレ時々ノ思ヒ出ノ一ツタリ

亦演習ニ於イテハ良ク何一ツ知ラム、我レ等ニ手ヲ取リ足ヲ取リ両親ノ如ク、教育サレ単独飛行ニ出ル前等ハ同乗サレ良シ今度ハ落付イテ一人デ行ツテ来イト云ハレ手離ナサレ非常ニ熱心ニ見下サレ或ル時ハ精神弛環セシト云ヒ単独ノ単装ニテ漢江ノ砂地デ戦闘教練実施シ、最初怒リ居ルモ、終リニハ実ニ笑顔デ軍人精神備ル区隊長タリ

我レ等ヲ立派ニ仕上ゲ卒業サセヨウト深ク御骨折リ下サレシニ今日出発セントス

我レ等心中ハ全ク子ヲ取ラレタ親鳥ノ如シ（「親ヲ取ラレタ小鳥」の誤りか）、シカシ大命ノ致処仕方ナシ我レ等ハ今迄受ケシ教訓ニ反セズ立派ナ空中戦士トシテ区隊長殿ノ後ニ続クベク努力セン、

※

渋谷中尉殿　高橋金太郎

教育ノ父タリシ渋谷区隊長殿ト別レル事トナリ誠ニ残念ニ思フ然シ大命ニ依リ致シ方ナシ　我々ハ幸福者ナリアノ如ク人格ノ高イ又精錬ナル操縦者タルイ方ヲ区隊長トシ今日迄何等事故モ無ク円滑ニ演習、其ノ他ニ邁進シ来ル事此レ皆誠心指導ヲ深ク感謝スルト共ニ区隊長ノ最後ノ言葉　必勝ノ精神、必勝ノ技倆トヲ練磨シ特攻隊ニ続カム之レ即チ区隊長ニ対スル最上ノ成スベキ事ナリ

※

「渋谷中尉殿」丹新昭二

待望ノ飛行演習ヲ始メテコヽニ六ヶ月其ノ間我々ノ為　非常ナル意気ト熱トヲ以テ操縦ニ内務ニ　アラユル方面ニ於テ御努力下サレシ区隊長殿ト御別レスルニ当リ過去ヲ振返ッテ見ルニ、初メテ飛行機ニ乗ル、イタラヌ我々ヲ本日迄アル時ハ厳父ノ如クアル時ハ慈母ノ如ク又アル時ハ我々ト一緒ニナッテ童心ヲ以テ戯レ実ニ操縦者トシテノ人格ヲ徳ヲ以テノ御指導ヲ受ケ本日ニ至リ　後一ヶ月半ニテ基本操縦ヲ終リ得ルニ至リタル御恩ハ実ニ大ナルモノアリト信ズ、コノ御厚恩ニ報ユル道ハ唯一ツ、立派ナル空中勤務者トナルベク　必勝ノ精神、必勝ノ技倆ヲ堅持シ操縦者必須ノ精神要素ナル竹ヲ割ツタ精神ヲ持ツテ一意専心自己ノ任務ニ邁進スベキナリ

※

「渋谷中尉殿」

一区隊　谷口　肇

期間ハ短イガ幾度カ御注意ヲウケタ、御注意ヲウケル度ニ区隊長殿トシテ父ノ如キ親身ヲ感ジ、信頼ヲ深メテ来タ当派遣隊ニ転属シテ二十三日、教育主任トシテ吾等ハ本部前ニテ申告シタ、其ノ時「服装ヲ見テ見ヨ」ト注意ガアリ、直チニ教育ガ始ッタ

知ラヌ所ヘ来テ吾々ハ勝手ガ解ラヌ儘ニドウシテヨイモノカト躊躇スルガ其度ニ区隊長殿ノ優シイ御指導ガ有リ、今日迄何一ツノ不安モ感ゼズ学科ニ演習ニ精進スル事ガ出来タ

「オ前達ハ皆ニ後レテオルト考ヘ、焦ッタリ迷ッタリシテハイケナイ、土台ノシッカリセヌ所ニ家ハ立タヌ」ト云ハレ自分ノ心ニアッタ焦セリヲ見澄サレ狼狽シテシマッタ

区隊長トシテ教育ウケ、吾等ハ区隊長殿ヲ慕ヒ一心同体トナリ短期間乍ラヨリ以上ノ進歩向上ガアッタ、今卒業ヲ前ニシテ吾等ガ父ト仰ギ慕フ区隊長殿ニ去ラレルハ偲ビ難キ苦痛デアリ哀惜デアル

海山ヨリモ大イナル御恩ト片眼ヲツブリマブシサウニ吾々ニ教ヘ下サレタオ姿ハ永久忘ルヽ事ノ出来ナイ所デアル

最後ニ残サレシ御教訓ニ惰ヒ、区隊長ノ熱ト意気ヲ想起シ操縦教育訓練ニ努力セネバナラヌ

※

「渋谷中尉殿」　鷲頭新吾

我等ノ区隊長殿、父上トモ仰グベキ区隊長殿ガ転属サレルコトヲ聴キ非常ニ驚キタ

リ、然シ大命トアラバ我々ノ驚キ等ハ問題ニナラヌ、転属先ハ我ガ航空ノ中心トモ当ルベキ所ナリ、前途ニハ実ニ洋々タル我々ノ憧レトスルモノアリ、ソレヲ思ヘバ喜ンデ御送リシナケレバナラヌ

思ヘバ入隊以来、父トモ仰グル区隊長殿トシテ終始熱ト意気トノ教育ヲサレタリ、演習ニ内務ニ凡テノ方面ニ厳正ニシテ其ノ御教育ニハ只々頭ノ下ル程ナリ、苦シキ事、面白キコト、種々ノ想ヒ出ガ走馬燈ノ如ク頭ノ中ヲ駈ケ巡ツテヰル

大刀洗陸軍飛行学校否日本中何処ヲ押シテモ此様ナ立派ナル区隊長殿ハ誰一人トテ右ニ出ル者ナシト我々ハ信ジテ疑ハヌ。

別レハ今ノ始ト云フ、マシテ空中勤務者ハ何時何処デ再会スルカ分ラヌモノナリ其ノ時ニ於テ御期待ニ反セヌ様御教訓ヲ克ク守リ一意専心任務ニ奮励努力シ一日モ早ク精錬ナル空中戦士タランコトヲ御誓ヒス

※

渋谷中尉殿　　第一班　内記覚

俊敏ナル手腕ト豊富ナル経験ヲ持タルル区隊長殿ハ明朗ナ温情溢ルル性格ノ方デアツタ　人格技量兼備ヘタ区隊長殿ノ根第一区隊ノ鉄石ノ団結ヲ以テ総テニ邁進シテ来タノダツタ　演習ニ内務ニ自分達ノ目標ヲ確然ト明朗ニ示シテ下サツタ

自分達ハ一生懸命ソレニ向ツテ努力シテ来タノダツタ、コノ名区隊長殿トオ別レスルコトハ非常ニ淋シイモノヲ感ズル「自分達ダケガ進歩カラ置イテキボリニサレタヤウダ」ト伊奈准尉殿ハ言ハレタガ自分達候補生バカリデナク当派遣隊全員ノ気持ダト思フ自分ハ最近来タバカリデソノ月日ハ浅カツタガソノ父ノ如キ区隊長殿ハ言ハレタ必勝ノ信念ハ必勝ノ精神ト必勝ノ技倆ヨリ生マレルソノ第一歩ハ足元ヨリ　ト言ハレタ　今日区隊長ガ訓示サレタ事ハ自分達操縦者トシテ又軍人トシテノ金言ダ自分ハ座銘トシテ必ズ任務達成ノ日迄頑張ル覚悟デアリマス

※

渋谷区隊長殿　　児玉勘治

顧リ見マスレバ昨年ノ八月当派遣隊ニ入隊シテ以来月日ハ矢ノ如ク流レ去リマシタ吾等一同当隊入隊当時ハ甘木生徒隊四ヶ月僅カノ地上勤務ニ過ギザル軍人トハ名計リニテ何等軍紀思考力ナキ愚ナ自分達ヲ三ツ子ヲ養（そだ）テルガ如クニ一々手取リ足取リ御指導下サレ又酷暑ノ日或ハ酷寒ノ日ニ緩ンダ吾等ノ精神ヲ緊張サセテ戴キ大過ナク今日有リシヲ心カラ感謝シテ居リマス

懐シノ飛行演習　区隊長殿ヨリ戴イタ鉄拳モ鉄拳トセズ自己修練ノ一端デ有リシヲ深ク感謝シ居リマス　広キ世間ヲ探セド又ト無キ良キ区隊長ト別レル事ハ候補生ヲ始メ一同ノ痛手デ有ルト思ヒ淋シク思ッテ居リマスガ大命ナレバ栓方ナシト此ノ上ハ区隊長殿ヨリ受ケタ教訓ヲ肝ニ銘ジ新区隊長殿並ビニ教官助教ノ教ニ随ヒ吃度く今迄以上ノ熱ト意気頑張リデ以ツテ立派ニ皇国航空戦士トシテ巣立ツベキ期待ニ沿フベキ万全ノ努力ヲ致シマスレバ御休心ノ程ヲ　最後ニ区隊長殿ノ御健康ヲ祈ツテ息（や）マヌ次第デス

※

第一区隊徳山正幸　　渋谷中尉殿

忘レモセヌ一月二十七日渋谷中尉殿ガ転属サレルト洩レ承ハリ其ノ瞬間ハ夢ダトノミ思ヒ事実トハ信ジラレナカッタ、併シ其ノ夢モ日時ガ立ツニ連レテ次第ニ明確ニナリ遂ヒニ今日ノ訣別ヲモセネバナラヌ様ニナッタ、思ヘバ自分等ガ去年十一月一日木脇教育隊ヨリ京城派遣隊ニ転属シテ以来三ヶ月間演習ニ内務ニ教練ニ親シク指導シテ下サッタ恐レ多イコト乍ラ区隊長殿ノ豊富ナル知識ト優秀ナル技倆ト卓越セル指揮統率ト永年ノ経験トハ実ニ我々第一区隊ハ勿論派遣隊一同ヲ感化セシメ日一日ト精錬ナル航空戦士ニナシテ下サッタ、斯カル全国ニ稀ニ見ル否、無比ノ区隊長殿ヲ戴イテ日々ノ演習ニ凡ユル軍務ニ努力スルコトガ出来タノハ実ニ無情ノ幸福デアッタ。

併シ●（未読　口偏に面）イカナ、卒業ヲ前ニ吾々ノ卒業ヲ見ズシテ転属ナサルトハ、実ニ感慨無量デアル　筆舌ニ尽ストコロヲ知ラズ、又吾々ノ卒業ヲ見ヅシテ転属

サレル区隊長ノ心境ハ如何バカリダラウ、言語ニ絶スルモノヽアルヲ察シテ余りアル、吾々ハ泣イテモ泣キ切レヌ、此レカラ来ル我々ノ毎日ハ渋谷中尉殿ガ屹度激励シテ下サルコトダロウ。

然シ大命ノ存スル所　吾々ハ涙ノ中ニモ喜ンデオ送リセネバナラヌ、皇国存亡ノ秋斯カルコトデ一喜一憂スベキデナイトヤヽモスレバ出テ来ル涙ヲ押ヘ押ヘ静カニく過去ヲ顧ミルニ只管今迄ノ努力ノ足リナカッタコトヲ悔ユルノミデアル、アノ日アノ時モット区隊長殿ノ注意ヲヨク守ッテ全力ヲ尽シタラヨカッタ。「樹静カナラントスレバ風止マズ」ノ感深キモノガアル、今更悔ユルベキトキデハナイ。我々ノ訓練ハ当ニコレカラダ。我々ハ十二分区隊長殿ノ心境ヲ推察シテ区隊長殿ノ御期待ニ副フベク全身全霊ヲ打込ンデ日々ノ業務ニ勉励シ鴻恩ノ万一ニ報ヒ奉ラネバナラヌ。　ソシテ固ク区隊長殿ニオ誓ヒスル、何レ空中勤務者トシテ澄ミ切ッタ大空デ面会出来ルコトヲ信ズル。区隊長殿ノ数々ノ御教訓ハ永遠ニ肝ニ銘ジテ実現ニ努メン　唯々大命ニヨリ転属ナサル区隊長殿ノ御健勝ヲオ祈リシ吾々ノ健闘ヲ誓フノミデアル。

※

渋谷区隊長　　一区隊　原田瑞夫

「此レヨリ忽ニ万端ノ用意ヲ済セ就寝、時間ハ無イガ為シ抜ク所ガ我等ノ修養ダ、スグ始メ、イヽカ」厳然トシテ我等ノ前ニ立タル注意ヲサレタ中尉ノ方、週番肩章モ鮮カニ厳シイ印象ヲ残サレテ内ヘ入ラレタ方、此レガ京城教育隊ニ始メテ足ヲ踏ミ入レタ晩ノ我等ガ父　渋谷区隊長デアツタノデアル

アノ晩以来既ニ半ケ年、雨ノ日モ風ノ日モ、照ルニツケ曇ルニツケテ我等ノ身ヲ案ゼラレ我等ノ為ニ御骨折下サレシ区隊長殿ハ遂ニ今月三十日鉾田飛行学校ヘ転出サル、コトニナリ、誠ニ感慨一入深キモノアリ、大命ノ致ス所トハ謂ヘ、後一ヶ月半ヲ余スニ到リシ基本学校ノ卒業ニ区隊長殿ノ元気ナル御姿ヲ見得ズトハ。「我等ハ斯ク立派ニ次ノ課程ニ巣立チ得マス」ト　一同ノ姿ヲ御見セシ度ニ、モ早叶ハズ。

入隊当初ハ厳シキ感ヲ抱カセシモ束ノ間、或ハ学科ニ、運動ニ、教練ニ或イハ又ピストニ於テ和気アイ々　区隊全員ヲ笑ハセ愉快ニ過サセラレシ、又区隊長ヲ中心トセシナリ。又厳トシテ、我等ノ教育ニ当ラレ、少シモ許サレシ事ハナシ、我等ガピストニ於テ不注意ニテ飛行機ヲ見居ラズ鉄拳ヲ頂キシ事モアリ、又幼キ子供ヲイタハル慈父ノ如ク頭ヲ撫デラレ面喰ヒシコトモアリ、区隊全員ト裸体ニテ「此ナター次ノ山！東―瀧ノ川ー」等ト御上手ナ好イ声ヲ張リ上ゲラレ角力ニ砂原ニテ熱中サレ、日ノ西ニ傾クモ知ラザリシ有様、或ハ戦斗教練ニテ「水ニ入ル程ノ勇気ガ無ケレバ駄目ダ」ト謂ハレ、水ニ入リシヲ見ラレ叱ラレシ区隊長殿、今ハ唯走馬燈ノ如ク頭ヲ廻ルノミナリ。忘レントシテ忘レ得ザル思出ノ数々、一ツく。

噫、父ト慕ヒシ区隊長殿ハ京城派遣隊ニ無シ、我等ノ身体ノ一部ヲモギ取ラレシニ等シキ痛手ナリシナリ、区隊長殿鉾田ヘ転出ノ声ヲ耳ニシタ時ノ区隊全員ノ驚、何ニタトヘラレンカ。

恐シサ、悲シサ、和サ、雄大サ、凡ユル形容詞ヲ以テシテ表現スベキ此ノ六ケ月間、区隊長殿ハ静カナ而シテ一沫ノ厳シサモテル言葉ニテ話シヲサレシヲ最後トサレタリ。駅頭ニ見送リサレザルヲウラミツヽ校門ヲ出ル自動車ノ中ヨリ再ビ敬礼サレシ姿、自ラ眼前ニ浮ビ来ルヲ如何トモナシ得ズ。今ハ唯、去ラレシ後ノ一ケ月半ヲ日々訓練ニ精進シ戦場ニ立ツ日ノ早カランコトヲ区隊長殿ニ誓フノミナリ。区隊長殿京城ヲ去ルヽモ我等ノ心ヨリ精神ハ去ラズ、残サレシ御訓ヲ再考シ御面倒ノ万分ノ一ニモ報ユベシ。

必勝ノ信念ヲ堅持、精神技倆ノ必勝ヲ基トス、操縦者タル素竹ヲ割リタル如キ精神ニテ（苦難ノ途ハ未ダ未ダ遠シ）不注意ニヨル事故ハ絶対ニ不可　任務ニツク迄倒ル、ベカラズ、本日ノ青空ノ如キ広キ心ヲ以テ日々ノ生活ヲ律スルベシ　以上ノ御教訓ヲ

胸ニ、又何処カニテノ会合ヲ楽ニ益々精錬ナル空中勤務者ノ素養ヲツムベク努力セン。

※

花輪、阿万、津川、水の、坂越、高の曹長、前田軍曹、原・武内・生家伍長　酒井・藤井兵長ノ面々　三月二日十四時発ニテ熊谷飛校ニ出発。愈々緊迫シテ来タ様子　私ノ出ルノモ間近クナツテ来マシタ様デス。グラマン位ナラ可成リ落ス自信ヲ持ツテオリマス。一足オ先ニ大イニヤツテヤッテ下サイ。学生モ皆区隊長殿ノ訓ヘヲ固ク守ツテ張切ツテオリマス　安心シテ奮斗シテ下サイ。官舎ノ方ナド大シタ変ツタ事モアリマセン　五四三部隊ト変リ軍人ガ増ヘテ若キ軍隊ラシクナツテ来マシタ　武士ハ散リ際トカ私ナドモ卐（飛行機の記号）ガナクナラヌウチ出掛ケテ老骨に鞭打チ大イニ死華ヲ咲カセル覚悟デオリマス

品物三（酒二升、袋一、外一）御受取リ下サイ　只々御武運ノ長久ト健斗ヲ祈リツヽ、

三月三日

伊奈准尉

渋谷中尉殿

学生達の区隊長に対する感想は右に掲載した通りであって、あえて要点を抜粋するまでもない。読まれた方の殆どは理想の教官・上司像を頭に描いて頂けると思う。

昭和二十年三月、教え子の卒業を見届ける事も叶わず、教育半ばで渋谷氏は教育隊（京城派遣隊）を離れ、鉾田教導飛行師団に転出となり、身重の妻は遅れて郷里山形の実家へ身を寄せる事となった。

当時の回想で残っているものを一件紹介する。幹候・特幹・少飛出身者等、木脇教育隊関係者の文集『行雲』には、「水平線をみて宙返り」と題した一文が収録されている。特幹一期生の宮本均氏（のち第四三〇振武隊）の寄稿によるものである。

（前略）

昭和十九年十月、特殊飛行の中途で血沈組（約三割か）が出て、また分科が決った。小生は幸に偵察分科で司偵要員とのことであったが、下旬に朝鮮へ特別派遣と云う事で二十四名を指揮して半分を大田教育隊へ、半分が京城教育隊へ転属した。一区隊々長は渋谷健一中尉殿で、着任申告時に「ここの訓練は厳しいぞ、ボヤボヤするな」と喝を入れられた。何くそ京城組に負けてたまるものかと訓練に励んだが、その懐かしい隊長も二十年六月十一日第六十四振武隊として九機編成（※実際は十一機編成）で沖縄へ突込まれた。

この文章の様に、教育隊には特別派遣の名目で不定期に学生が入って来ていたことが分かる。

また、平成二十五年、宮城県護国神社において遺族会向けに、元第四一九振武隊員中村五郎元伍長の講演があった。京城教育隊出身だという。講演後に少しお話しを伺ったが、「ああ、渋谷さんという方もいましたねェ」と、余りピンと来ていない様子であった。詳しくお聞きすると、京城教育隊は教育途中で改編・軍隊化され「宙第五四三部隊龍山隊（第九練習飛行隊京城派遣隊）」となり、渋谷氏転出直前の二月二十八日に大田（タイデン）教育隊から着隊しているという。先に掲載した教え子の文を読んでも、同じ特幹一期とはいえ、人により様々なケースがある。

先ほどの十一名の教え子のうち、数名住所が判明した方もいたが、誰一人連絡のつく方はいなかった。彼等のうち、徳山氏は第四三〇振武隊（中練）へ、原田・不破氏は第四一八振武隊へ編入され朝鮮で訓練中のまま終戦を迎えている。また、伊奈准尉（ノモンハン航空戦の生き残りと聞く）の文中に出てきた熊谷飛行学校へ転出したという十二名は花輪洋少尉を隊長として第九十九振武隊（中練）を編成している。この隊も筑後飛行場に待機していたと見え、出撃の日を迎えることはなかった。

※　※

文章や報道等では今も昔も、「特攻隊員は」と簡単に括ってしまう事がある。しかし、それ以前の経歴は個人ごと異なる。当然のことながら忘れがちである。これからも調査を継続していく。

完

参考文献
『翔飛』
『行雲』
『飛翔への青春』
『日本民間航空通史』佐藤一一
『振武隊編成表』と号業務班
『陸軍航空特別攻撃隊各部隊総覧第２巻』

陸軍航空特攻と爆弾　追記

大槻　健二

前号にて掲載させて頂いた原稿のうち、紙面の関係上削除することとなった事例の二件を紹介する。この二件は前者が昭和二十年六月七日出撃（離陸不能）、後者が同年六月十一日出撃である。両者に共通している「帰還―反復攻撃」は沖縄戦も終盤であったからであろうか。「参謀」「部隊長」とは言っても具体的に誰かは分からない。

・第六十三振武隊長Ｋ氏の回想より

第六航空軍司令部からは少佐参謀が一人見えていました。（中略）やがて出陣式が行われました。（中略）その時に参謀は、沖縄到達前でも敵艦船に到達したら、艦船種をえらばず攻撃せよ。攻撃の手段は必ずしも体当りでなくとも良い、生還してまたやってくれといわれました。みんな一様によし俺が一番槍をあげるんだと奮いたったことです。

（『あかねぐも』より）

・第六十四振武隊員Ｓ氏の出撃前日の書簡より抜粋

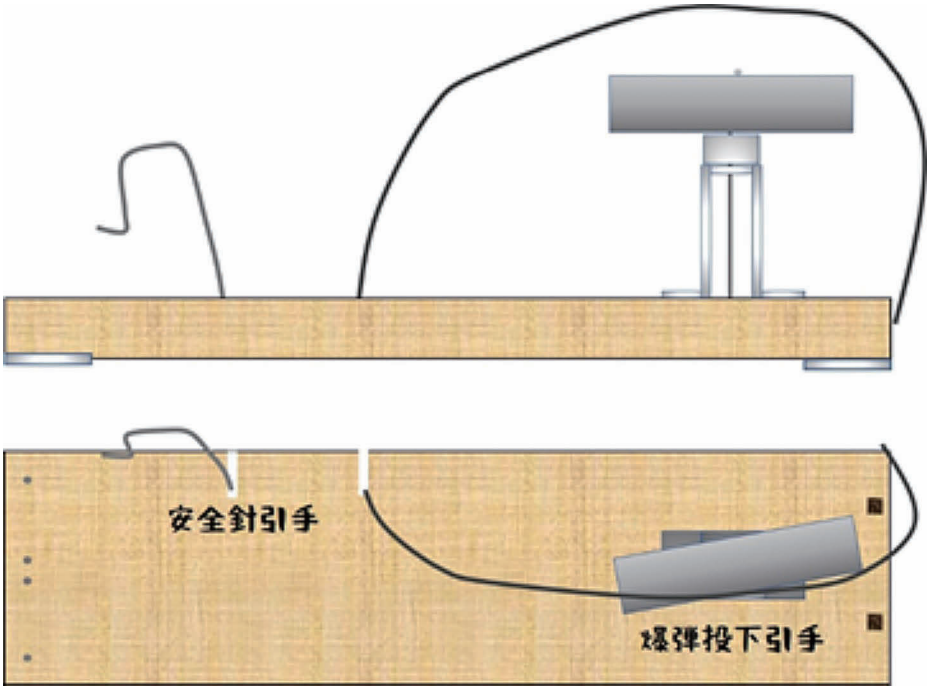
部隊長ガ　貴官等ノ様ナ優秀ナ技倆ノ振武隊ハ六航軍初ツテ以来ナシ　一回ノ出動ニ於テ果ツルハ甚ダ遺憾ナリ　武功ノ暁ハ必ズ生還シテクレトハ言ワルヽモノヽ生還ハ期スヲ得ズ、立派ニ最後ヲ遂ゲル覚悟デス

高度に錬成された隊員への餞の言葉であったとも取れる訓示ではあるが、器材（投下可能・不能）の情報は承知している上での言葉であると考えている。読者の皆様はどう思われるだろうか。

最後に、筆者の先輩に紹介された米国の「スミソニアン航空宇宙博物館」ホームページに掲載してあるキ一一五「剣」（海軍名称「藤花」）の写真を見ていたところ、爆弾投下及び信管安全風車解除装置が操縦席左側に設置されている事を確認した。全機種統一でないのは前回述べた通りであるが、参考までにイラスト化したものを掲載しておく。

疑問点の解消の一助になればと思う。

補足おわり



海上挺進隊・沖縄の戦い（続）

会員　船舶特幹１期生　中溝　二郎

第二戦隊及び基地第二大隊

海上挺進第二戦隊は、暁（後に球と変る）第一六七七八部隊と称し、十九年八月上旬から豊島基地で訓練に入り、九月一日付を以って宇品で正式に編成された。

戦隊長は陸士五二期の野田義彦大尉（十二月少佐になる）、本部付将校（副官）として竹田政之少尉（幹候八期）、第一中隊長大下真男少尉、第二中隊長中川好延少尉、第三中隊長原稔少尉（いずれも陸士五七期）で、群長はいずれも船舶幹候隊出身一〇期の見習士官（二十年一月少尉になった）、隊員はすべて特幹一期であった。

九月三日休暇を終って同日幸ノ浦基地に集結し、同月十日に戦隊本部及び第一中隊と第三中隊の一部が輸送船に乗船し、第二中隊、第三中隊はそれぞれ各別に翌十一日舟艇とともに輸送船に分乗して宇品を出航した。

このうち本隊は九月十三日に門司を出港して、二十三日鹿児島港、二十六日には那覇港と順調につき、同夜任務地の沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉（アカ、慶良間諸島中の阿嘉島）に上陸した。その他の中隊は出航が遅れ、十一月三日に鹿児島港を出港して七日に阿嘉島に着いたが、第三中隊は舟艇の一部を那覇港に残置したため、八日に台風を受けて同港内で八隻が沈没するという事故を出した。同戦隊の舟艇配備については、第一中隊が慶留間（ゲルマ）島に秘匿され、第二、第三中隊は戦隊本部とともに阿嘉島の南部及び西部海岸に基地を設定した。

二十年に入ると一月二十一日及び二十二日の両日来襲した米軍艦上機グラマンによる空襲を受け、本島との連絡用の船舶（機帆船）及び積載中の器材の沈没被害を出したが、㋹舟艇及び人員には損害はなかった。

二月中旬、第三中隊では壕内火災により、舟艇二隻が炎上し、二名が火傷を負った。

また二月中旬には基地大隊の主力が沖縄本島に移動するのに伴い、朝鮮軍夫による水上勤務中隊第一〇三中隊の約三〇〇名（監督に当たる者として将校二名、下士官兵二一名を含む）が来島し、基地隊の残留兵員とこの軍夫の隊が戦隊長の指揮下に入った。

またこの頃に、これまで阿嘉の国民学校を兵舎として統合されていた各中隊は、それぞれ秘匿基地付近に分散し、準備態勢に移った。

三月二十三日午後から、米軍艦上機の本格的な空襲を受け、第三中隊及び本部の舟艇合計二〇隻が炎上し、負傷者四名を出し、同中隊は海上出撃不能の状態に陥った。

翌二十四日朝、座間味島から大町大佐及び三池少佐らが第三中隊基地から巡視のため来島上陸したが、同日も慶良間一帯は終日空襲を受け、同日の夜半になると空母四隻のほか、米軍艦艇は慶良間列島近海に接近し、同夜から艦砲射撃が始まり、引続いて二十五日も空襲と艦砲射撃を受けた。

二十六日朝夜明け前に、大町大佐一行は、第二中隊の宮下力少尉（幹候一〇期）ほか三名（特幹）の操縦する三隻の㋹舟艇で慶良間海峡を横切り、渡嘉敷島への渡航に成功し、夜明けに舟艇は基地に帰還した。

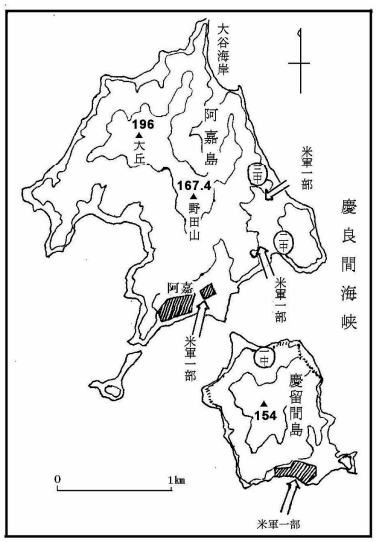
そしてこの日午前八時五分、島の南部に当たる阿嘉部落海岸から米陸軍第七七師団三〇五連隊の第三大隊約三〇〇名が、戦車とともに上陸を開始し、続いて慶留間部落海岸にも同じ連隊の第一大隊二〇〇名が上陸を行なった。

阿嘉島の戦隊及び基地隊は、島の中央高地に集結し、米軍と交戦して戦死者七八名を出したが、戦隊長は同夜残存の舟艇による強行出撃を企画して、軍司令部宛に全員玉砕の旨電報を打たせ、無電機を破壊した後、兵員を三隊に分け、二十七日午前零時を期して全員米陣地に斬込みを決行することにしたが、結局使用可能舟艇の点検や泛

水態勢の準備不充分のため失敗に終り、舟艇出撃は不能となった。

一方この出撃を有利にする目的で行なわれた斬込隊のうち、整備中隊は中隊長鈴木茂治大尉以下が、米軍重機陣地の正面で発見され、部落内で一六名が連って戦死した。

なおこの斬込戦には住民による防衛隊及び学童の義勇隊も参加した。



この夜の斬込み行動に先立ち、戦隊本部は第三中隊の篠崎純一伍長（特幹）を選出し、慶留間にある第一中隊長大下少尉に対する出撃命令の伝達を命じ、命を受けた篠崎伍長は単身海峡の横断渡泳に成功した。（なお同人は後記する大下少尉らの出撃に加わり戦死した。）

この戦闘について米軍側記録は次のようになっている。「米軍にとって上陸は簡単に行なわれたが、内に進むにつれて手ごわい反撃にあった。阿嘉島では日本軍の一個分隊を艦砲で壊滅、同じ日の午後、島の東部高地で、しばらく斥候戦を続けたあげく四八名の日本軍を倒した。彼らは洞くつや塹壕の中から小規模の反撃を試みたが、それは大した防衛力にはならず、二十六日午後五時までには島の三分の二が占領された」

翌二十七日再び迫撃砲の集中を主とする米軍の攻撃を受け、一時は中央高地付近まで米軍が進出したが、基地隊が反撃してこれを撃退した。隊本部では同夜第二回目の斬込みと、再度の舟艇出撃を計画し、午後十時から斬込隊は雨中に出動したが、これも使用可能な舟艇を得るに至らず再び失敗に終った。

このため二十八日には部隊全員と住民を谷間に集結させ、一時は昭和初年まで掘っていた銅山の廃抗にたてこもることを計画したが、更に陣地を立て直し持久戦を行なうことに変更し、中央高地（野田山と呼んだ）を中心に各隊が陣地構築に移った。

以後他島と同じく、米軍は沖縄本島の戦闘に廻るため、三月の末に全面撤退した。

四月九日に至り、慶留間島に第一中隊と基地第一小隊の生残者がある様子が認められたため、第二中隊の吉屋懿倫伍長（特幹）が命令を受けて、偵察のため単身渡泳し生存者との連絡に成功し、戦隊の第一中隊の高原少尉以下の全滅を確認し、翌十日に第二中隊の宮下少尉を長とする救出隊が密かに渡島し、水上勤務中隊の小隊長永田少尉以下軍人一六名軍属三六名を、海峡に敵船の碇泊する中で収容に成功した。

四月十日以後になると昼間は上陸してくる米軍と散発的な小規模な戦闘が繰返されたが、特に五月十三日には、米兵の約二十名が本隊のある座間味島から来島し、第二中隊秘匿壕内の残存舟艇の捕獲作業を行なったため、第三中隊の古川賢二少尉（幹侯一〇期）以下九名が、戦隊長の命令を受けて作業中の米兵の背部に迂回し白昼の奇襲斬込みを行ない、米兵十数名を殺傷し、舟艇の捕獲を阻止することは成功したが、負傷者を出し、更にその後三日間連続して米軍の報復攻撃を受け、死傷者三名を出した。

六月中旬から、戦闘の初期に米軍に投降したもと基地隊第二小隊長の日本軍将校による降伏の勧告が連日にわたって繰返され、二十六日には島の海岸で戦隊長以下数名と、米軍の軍使との会見が行なわれたが、隊は投降の勧告を拒否し、更に徹底して持久的抗戦を行なうことを通告した。

（この点について、米軍記録でも沖縄戦終了後、第一〇軍から代表がきて阿嘉の日本軍指揮官に降伏を勧告したが、この指揮官は肯んじなかったと記録されている。）

これにより各隊は食糧の確保と、更に決戦態勢をとることに努めたが、七月以降は食糧は絶無の状態に立至り、一方マラリア、栄養失調患者が増加し、戦闘遂行は不能の状態となった。

このため非戦闘員、軍夫、基地隊員などで米軍への投降者も日を逐つて続出した。こうした状態で八月十六日に米軍の報道と勧告により、日本の降伏を知り、更に十八日には隊から軍使が派遣されて、渡嘉敷島に渡り正式に日本の降伏を確認し、二十三日残存者は武装解除を受け、同日沖縄本島の屋嘉収容所に入つた。

なお篠崎伍長によって連絡を受けた第一中隊長の大下真男少尉、群長の引田耕一郎少尉、本部予備隊群長の帆足孝男少尉、（共に幹候一〇期）ら一六名（本部要員のうち、帆足孝男少尉以下六名は舟艇を炎上されたため、米軍上陸の前夜同島に移っていた）は、二十八日（または二十七日か？）夜明け前に、舟艇四隻で出撃し、慶良間海峡で米軍の船団を攻撃し、（この結果は駆逐艦一隻を沈め、輸送船二隻を撃破したとされている）引田少尉艇と他の一艇（特幹四名が乗艇していた）は、同海峡で爆沈し、八名が海上戦死となったが、大下少尉以下八名の乗る二艇は沖縄本島に到着し、軍司令部に慶良間の戦況報告を行なった。

（米軍側の記録によれば三月二十六日から三十一日までの間に、この海域で「駆逐艦一、掃海艇一が触雷で沈み、歩兵上陸艇ＬＣＩ（Ｇ）一が敵水雷艇と遭遇して損傷を受けた」としている。これらのいずれかは大下隊の攻撃によるものではないかと推測される。）

以後大下少尉らは二四師団（山部隊）の指揮下にあって、船舶工兵二六大隊に配属され、五月下旬から二十九日に至るまで与那覇北側宮城で戦闘に加わっていたが、山部隊の撤退に伴い南部に転進し、六月二十日与座嶽で米軍の猛攻を受け全員が戦死した。

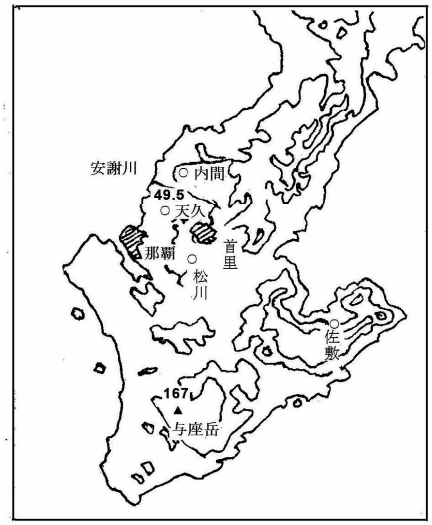
（なお出撃者と基地小隊は、軍司令官の感状を受け、海上戦死者八名は特攻戦死として将校は大尉に、特幹は少尉に特進された。なお、戦死者名簿には特攻特進者は十名となっている。）

この出撃者を除き、慶留間にいた第一中隊の戦隊員は、群長高原工少尉（幹候一〇期）を始め、全員自決または戦死するに至った。

なお同中隊で戦闘開始当時那覇にいた群長の稲垣栄少尉については、第三戦隊の関連で記述する。

又、戦時中日本兵の遺品等を蒐集していた元米海軍士官より返還された遺品の中に、第二戦隊関係のものとして、認識票一ヶ（第二戦隊の番号は確認できるが所持者名は不明）と第一中隊員で海上特攻戦死した特幹鍵本賢治の手帳があり、手帳は遺族に返還された。（平成十五年）

同戦隊の戦死者は、将校五名、隊員三六名の計四一名で（うち将校二、隊員九は沖縄本島での戦死）中途での内地還送者一名があった。



海上挺進基地第二大隊は、昭和十九年八月二十八日宇品で編成され、暁（後に球）第一六七八九部隊と称し大隊長は古賀宗市大尉（少尉候補者一六期で、十二月少佐になる）で、兵員は召集の補充兵が多く、歩

兵第六一連隊の和歌山県出身者及び静岡、大阪の出身者が多かった。

大隊の主力は九月二日宇品を出港し、同月九日沖縄県島尻郡阿嘉島に上陸し、阿嘉島及び慶留間島での基地設営に当たったが、整備中隊の一部は戦隊の各中隊と輸送船に同乗し、十一月に全員到着した。

二十年の二月十八日に、沖縄本島の防衛兵力として軍の改編命令に基づき、勤務一ヶ中隊（一七五名、中隊長庄田忠弐大尉）と整備中隊（中隊長鈴木茂治大尉以下五九名）の約二三〇名を残して、主力兵力約七〇〇名は本島南部に配備されることとなり、独立第二大隊として当初球兵団中の独立混成第四四旅団（旅団長鈴木繁二少将）に配属され、米軍が上陸した四月始めには北地区隊として知念半島の佐敷付近にいたが、戦線の展開に伴い、四月下旬に六二師団（石部隊）に転属されることとなり、北上して首里西方の松川地区の防備を担当していた。

五月三日を期して行なわれた軍の総反攻失敗後の戦線整備の際に、再び独混四四旅団の所属に帰り、五月七日那覇の北方の要地である天久（アミク）西方台地に、第一線兵力として進出し、防備陣地を張っていた。

南下する米軍は、この頃日本軍の東西両側から包囲する形で進撃を開始し、五月十日夜明けには内間（ウチマ）両側から安謝川（アジヤ）に架橋を行ない、これを利用して歩兵部隊が南下してきたため、大隊から選ばれた橋梁爆破挺進隊（将校一名、下士官一名、兵六名の編成）は、米軍内に潜入し、戦死一名を出したが、この架橋爆破に成功し、一時は米軍の渡河行動を妨害し得た。しかしそれも束の間で、米軍は逐次この方面の兵力を増加し、同日の夕刻には安謝部落の東西地区が共に占領され、更に五月十二日に至って、天久台地も米軍に占領されるところとなり、大隊長以下は昼は台地下の洞くつに潜み、夜間は台上の米陣地に対し斬込みを行ない、十五日に至るまで継続的に敵状報告をしていたが、同日には残存者全員で米軍陣地への斬込みを行ない、大隊長以下主力は戦死するに至った。

これ以後大隊の残存者は、大隊としての組織的戦闘は不能となり適宜他の隊と行動を共にしながら島尻南部に撤退した。

一方、阿嘉島及び慶留間島に残留した隊員は、防衛隊、水上勤務中隊、義勇隊とともに、戦隊長の指揮下に入ることになったが、三月下旬の米軍上陸時には、基地中隊長の庄田大尉は那覇に出張中であったため、帰島の機会を得ず本島で戦死した。

阿嘉島にあった基地中隊（中隊長代理宮島中尉）は、地上戦闘においては主力の位置を占め、米軍が上陸を行なった三月二十六日夜と、二十七日の再度の米軍陣地に対する斬込みや、防衛にも主要な戦力となった。

この間に整備中隊長鈴木大尉が、二十九日には本部副官である松本中尉らが戦死した。

また慶留間島に残留していた者は、二十八日夜明けに行なった戦隊の大下少尉らの泛水出撃を援助したが、多くは二十六日、二十七日に米軍の攻撃を受けて、中村少尉以下戦死し、以後残存者は米軍の掃討を避けて同島内に潜んでいたが、前記のように四月十日に至って、水上勤務中隊の小隊長永田少尉以下生存者は救出されて、阿嘉島の本隊に加わった。

同大隊の被害は、総員八八一名中阿嘉、慶留間の六五名とを合わせて、戦死者六三四名であり、生還者は二一七名で、他隊への転属三〇名があった。

なお水上勤務中隊の軍人は一〇名が戦死し、軍夫の戦死は不明である。

「ある沖縄戦」第二戦隊員　儀同　保著

特攻出撃　大下中隊の最後

―慶留間島の戦闘―

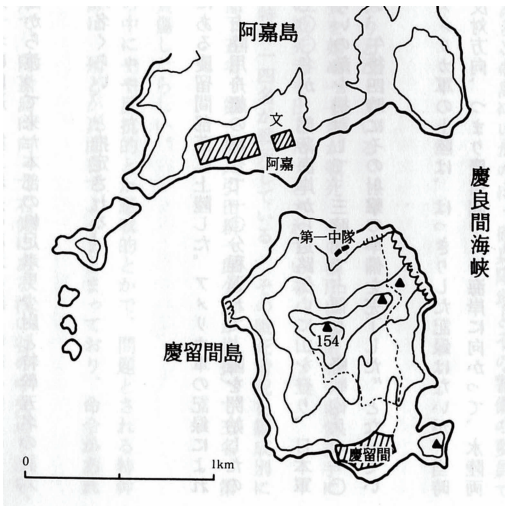
慶良間列島の中の一つ慶留間（げるま）島にいた海上挺進第二戦隊の第一中隊と、その協力部隊であった基地小隊がここで行なった地上戦闘の情況は、かなりの部分が不明のままであるが、現存資料、又は関係者の手記、聞き取り等により判明した事実及び、確実に推量されることを記載する。

この時此処に駐屯していた第一中隊員大下真男少尉以下二八名（戦闘前内地送還の吉武亨伍長、群長稲垣栄少尉と特幹対馬伍長は沖縄本島出張中）三月二五日の夜更けに、阿嘉島から渡って来た本部の帆足孝男少尉と特幹五名（舟艇を炎上されたため）で計三四名。（内　稲垣少尉のみ生還）

基地小隊が中村健次郎少尉の指揮の下に（この指揮官であった中隊長の庄田大尉は、沖縄本島に行っており、帰る機会を失って本島南部で戦死した。）約五五名、水勤隊と呼ばれた軍属の小隊は、永田少尉の指揮の下に、下士官と兵で七名、軍属は約六〇名。

従って合計で将兵九六名ほどと。軍属を併せて一五六名くらい、と推定される。

まず、戦闘の始まった昭和二〇年三月二六日からのこの島の戦況についてみると、三月二六日午前八時二五分、アメリカ軍は島の南側にある慶留間部落に上陸した。アメリカ軍の記録によれば、阿嘉島より先にここを占領する予定だったのだが、上陸用舟艇の都合で一〇分程遅れて上陸を開始したのである。



この島には”歩兵七七師団の三〇五連隊第一大隊約三〇〇名が、部落海岸から道路伝いに山を登り。日本軍の壕の後ろから攻撃した。若干の抵抗があり二〇名くらいの敵を掃討して、三時間で占領し、野戦砲兵の一〇五ミリ榴弾砲ニヶ大隊の火器を運び上げる作業を行ない、午後四時にその射撃の準備を完了した”となっている。

アメリカ軍は慶留間島に一〇五ミリ砲陣地を設定し終り、ここに上陸した大隊は。翌二七日に渡嘉敷島の攻撃に向かい、阿波連海岸に上陸している。従ってこのあとこの島にいたのは、砲兵陣地とその警備の要員であったことになる。

詳しい戦闘の状況は不明であるが、この三月二六日における我が方の兵員損害は、次のとおりとなっている。

基地小隊は小隊長中村少尉以下、村田、川端の両伍長を始め一七名が戦死、その場所は秘匿場の南側裏手にある山の中腹が多く、水勤隊の軍属もこの日相当な数の戦死者を出した、とされている。

戦隊の方では第三群長であった高原工少尉を始め、特幹一四名が戦死している。

なお大下少尉は。この日首筋に砲弾の破片により、負傷したらしい。

この日の慶留間の戦いの中で、最も悲劇的であったのは、部落住民の情況である。

第一中隊の壕とは反対の、島の南の端にある慶留間部落では、青壮年男子は勿論、少年までも義勇隊に組織されて阿嘉に集められ、残っていたのは老人、子供と婦人達であった。

空襲が激しくなった二三日から、住民はポッポツと山に退避を始めたが、この島は周囲三キロ弱で、部落の裏手から北に向っての谷が一つあるだけの、阿嘉島や座間味島に比べれば単調な地形で、退避するにも適当と思われる場所はなく、軍を頼って反

対側の海岸に出ようとしても、左右の海岸は百メートルもの断崖で遮断され、また島の中央にある一五〇メートル程の山を越えようとすれば、砲爆撃の的になる、という逃れようのない状態であった。

こうした情況の中で、部落の者がウンジャ河原と呼んでいた谷で、親が子を、親戚の間では若い者が老人の首をしめ、殺した者も松の枝に下って自らの生命を断つ、という惨事が起きた。

この時の自決者は老人から子供まで二十数名であった。

この事実は、県の編纂した「沖縄県史」第一〇巻に、中村米子、大城昌子、兼城三良の各氏がその目撃した惨状を語っている。

なお阿嘉に集められていた島出身の防衛召集兵、義勇隊員の中には、こうしたことで自分独り生残り、家族のすべてを失った者もいる。

一方山の頂上近くまで逃れたが、それ以上逃れる方法もなくアメリカ軍に捕われた住民の様子は、戦闘中アメリカ軍が撮影した写真を編纂した、太田昌秀氏の「これが沖縄戦だ」（琉球新報社刊）に生々しい写真が載っている。

これ以後この慶留間島には、四月に入ってから部落を中心にアメリカ軍によって住民の収容所が作られ、一旦座間味に連行されていった近隣の島の住民のうち、慶留間と阿嘉の者はここに移され、下旬以後には伊江島の住民もここに収容されていた。

翌二七日の午前二、三時頃、阿嘉島の部落海岸から出た第三中隊の特幹の篠崎純一が、二百メートル程の海峡を泳ぎ渡り、秘匿場の前の浜に上った。

海峡には数隻の魚雷艇が入っており、阿嘉部落にもアメリカ軍が野営していたのだが、この頃整備中隊の斬込みが行なわれ、部落内で銃撃戦を行なっていた。

篠崎から野田部隊長の出撃命令を伝えられた少尉は、残った人員と舟艇で出撃を決意した。

このことにより昼間の攻撃から生残った者は、水上特攻として出撃することになる。

二七日は壕や谷間に隠れていたが、夜になると大下少尉は基地隊の永田少尉に、舟艇を出してくれ、と依頼した。

このまま情況をみたらと永田少尉らは言ったのだが、大下少尉は『阿嘉では全員で斬込みをやったし、隊長から出撃命令が出たので艇が残っている限りは出なければならぬ、』と強く言うので残っている者で舟艇四隻を泛水した。夜半を過ぎており二八日の夜明け前だった。

一中隊の引田少尉や本部から来た帆足少尉を始め、特幹の残っていた者全員が乗って出ていった。

あとは阿嘉で本隊が残っていれば、必ず救出に来てくれるだろうから、頑張っていようと谷間に潜んで待っていた。

このとき艇に乗って出たのは、合計二〇名になって居り、そのうち慶良間海峡での特攻戦死者が一〇名（引田少尉、特幹の樋口隆昶・中山桂一・島岡秀治四名。次の艇は、特幹の山田正作・鍵本賢治・杉田虎三・山本剛の四名計八名、この他、帆足少尉と篠崎は、沖縄本島まで行ったのは、はっきりした事実で復員時の整理の際、隊の責任者が彼らの功績を考え、海上での戦死扱いにした措置で、帆足少尉は引田少尉と共に陸軍大尉に、篠崎は他の特幹の海上戦死者と同様に、陸軍少尉に特進されている）、実際に海上で戦死したのは二隻に乗っていた八名である。

次の二隻は、それぞれ六名ずつ乗ったことになり、大下少尉艇には、石原正男、小林敬二、鷲塚外由、松岡義晴、木村昂）の計六名。帆足少尉艇には、松木泉。沢田捨男、台秀夫、松本和郎（いずれも本部要員）と、第三中隊から伝令に来た篠崎、の計六名と思われる。

もう一つ疑問として、この舟艇には一二〇キロ爆雷二個、合計二四〇キロを載せることになっていた。これに人間六名、一人平均五五キロとして三三〇キロを乗せて海上の行動ができるかは、何とも言えないところで、舟艇に少しでも不備のところがあ

れば、沈没は免れないだろう。

この点について極端な推測をすれば、このうちの一又は二隻は、爆雷を積まなかった（当時の艇の構造から、二個連結のものでなければならず。一二〇キロ一個ということはあり得ない）か、又は一隻だけは人間だけ七名か八名乗っていた、とも考えられよう。

これには”なぜ爆雷を積まずに人間だけを”という疑問もすぐに出て来るが、少なくとも舟艇で出撃し、アメリカ艦船を攻撃したことを軍司令部に報告することも、部隊長からの命令の一つであったし、また指揮官の大下少尉の立場として、同じような攻撃が今後もくり返され、遅かれ早かれ全滅することがみえているこの島に、二、三人の者だけ残れということも出来ない心境にあったろうと考えれば、これも容易に理解できることである。（現にフィリピンのリンガエンで、第一二戦隊が出撃した時には、重傷者まで艇に乗せて行った事実もある）

七

三月二六日には、慶良間諸島の西方古場島沖にあったアメリカの艦船団は、翌二七日には一部が慶良間海峡に入っていた。

従って二八日夜明け前には、慶留間のこの海岸から数百メートルの海面にも、艦船が碇泊していたことは当然に推測できる。

そこに引田艇ともう一隻が突っ込んで行き、投下した爆雷のあおりか、又はアメリカ艦艇の射撃によってか、二隻は破壊され八名はここで戦死した。

アメリカ軍の記録によれば、三月二十六日から三十一日までの間に、この海域（正確には慶良間海峡とはしていない……）で「駆逐艦一、掃海艇一が触雷で沈み、ＬＣＩ（Ｇ）一が敵水雷艇と遭遇して損害を受けた」としている。

だがここにいう触雷、つまり浮遊機雷に接触したということは、夜間でもあれば事実かどうか疑わしいし、またこの海峡に日本海軍の水雷艇が出て来たとは到底考えられない情況なので、これが大下隊の攻撃によるものではないか、という推測は相当固いものと言ってよい。

なお「米国海軍作戦年誌」には、三月二十六日駆逐艦ハリガンが沈没、三月二十八日に掃海艇スカイラークが機雷接触により沈没、と艦名を明らかにしてある。

アメリカ艦船を攻撃したあと、大下、帆足の二艇は、渡嘉敷島の南端を廻り、その日の朝那覇についた。

二七日夜に、船舶団長の大町大佐と、基地本部長の三池少佐らが乗った舟艇二隻が、渡嘉敷から那覇に向けて出たのだが、前島の沖と渡嘉敷の沖で沈んでしまっているので、これからみても大下少尉らが二隻とも那覇まで到着できたのは、極めて幸運に恵まれた結果と言えよう。

那覇に着いた大下少尉の報告に基づき、「大下水上特別攻撃隊、同配属部隊」は、三月三一日牛島軍司令官の名による感状を授与された。

その感状文は次のとおりである。

「右ハ陸軍少尉大下真男指揮ノ下昭和二十年三月二十三日以降沖縄群島二来襲セル敵艦隊二対シ水上特別攻撃隊トシテ挺進攻撃ノ機ヲ覘ヒツツアリシガ敵ノ砲爆撃刻々熾烈ヲ加フルニ伴ヒ舟艇ノ行動困難ヲ極メ隊長先ヅ傷ツキ隊員亦ソノ舟艇ト運命ヲ倶ニシ兵力遂ニ二十数名ニ減ジタルモ屈スルコトナク隠忍スルコト数日待望ノ突入命令特別幹部候補生篠崎純一ノ敵中遊泳突破ニヨリ伝達セラルルヤ

協力部隊ノ掩護下克ク四艇ヲ攻撃発進位置二集結二十八日払暁至厳ナル敵警戒線ヲ突破シテ慶良間海峡ノ敵泊地二潜入、敵二肉薄必殺ノ猛攻ヲ加エ駆逐艦一隻ヲ撃沈、大型輸送船二隻ヲ大破炎上セシムルノ赫々タル戦果ヲ収ム」

この出撃戦果は、沖縄本島では地上の戦闘の始まる前でもあり、全軍の士気昂揚の絶好の資料として、戦機を待つ全部隊に知

らされ、また感状が授与されたことは、軍司令部から大本営に通報し、やがて大本営発表となり天皇にまで達したことが、新聞にも第一面の戦果の記事として載った。

だがこの新聞発表があったのは、既に大下少尉始め全員が戦死した十数日後のことであり、感状を書いた軍司令官も摩文仁で割腹して果てた後であった。

朝日新聞

感状上聞

水上特攻隊の偉勲

二隻を撃沈炎上

沖縄敵泊地深く突入

第二戦隊第一中隊の出撃を報じた朝日新聞。写真は中隊長大下真男中尉（広島県呉市出身）

当時特幹の対馬を伴って沖縄本島にいた第三群長稲垣少尉は。この時のことを懐古し、“私は阿嘉島の戦闘に間に合わなかったことで、船舶団本部にいた何とかいう中尉にひどく怒られ、「お前の仲間は玉砕して果てたぞ、貴様独り生残って申訳が立つか、腹を切れ」、とまで言われたが、「同じ死ぬなら何かの役に立つ死に方をさせてくれ」と申し出たところ、「それなら別命を待て」ということで、しばらく謹慎の状態で糸満地区に待機していた

三月末に大下中隊長らが慶良間で戦果を挙げ、敵艦の中を突破して来た、という話は各部隊に伝わり、私も早速会いに行った。大下中隊長は首を怪我しているとのことで繃帯を巻いており、帆足少尉も一緒にいたし特幹の数名も元気であった。“と語っている。

なおこの後の稲垣少尉の行動は、

”四月末に軍司令部から呼出しがあった。司令部の判断では慶良間の戦隊のうち渡嘉敷には部隊が残っているらしいので、特攻機に対する情報提供のために、手廻しの発電で交信できる五号無線器を島に運ぶことになり、それを私に命ずるというものであった。

本島から見ても。慶良間の近くにはアメリカの艦船が多いので、それが成功するかどうかは判らず、多分海上で戦死することになるだろう、と覚悟はきめていた。

那覇に行ってくり舟を準備し、出発する前に大下中隊長らに会いに行った。帆足が「自分がやりたい、出来たら代ってくれ」と言っていたが、「お前は一度大役を果たして来たのだし、これは特に俺に出された命令なので、俺がやらねばならぬのだ」と言って別れた。

私の伝令要員として連れて来ていた特幹の対馬は、大下中隊長に渡してあったが、どういういきさつか判らなかったが、このとき第一戦隊の特幹（大川護）が一人私と同行することになった。“

稲垣少尉は高平という軍曹と共に、漁夫をしていた現地の防衛召集兵らと、くり舟三隻で慶良間に向けて出港、高平軍曹の乗った一隻が慶伊瀬島の近くで転覆、二隻は渡嘉敷島の手前にある前島に到着し、数日の間ここに潜み、五月始めの夜アメリカ艦艇の哨戒の間を縫って渡嘉敷島に着き、その任務を果たし、以後同島で本島の司令部に向けて情報を送り、特攻機の攻撃に貢献していた。

六月二三日、本島側の受信がなくなり、軍司令部に最後の段階が来たことを知った。

（これに関連する後日の話として、アメリカ艦艇が哨戒している本島と慶良間の海上も、条件に恵まれれば渡航できることが実証されたので、先に舟艇が沈み渡嘉敷に泳ぎ帰っていた三池少佐は、このくり舟を利用し漁民を漕手として渡嘉敷島を出、五月一二日に那覇に到着した。那覇近郊では、この頃阿嘉島から本島に移っていた古賀少佐が指揮する基地第二大隊が、安謝川を渡り那覇の北にある天久の台地を目指して、一挙に攻勢に出たアメリカ軍を迎え、激烈な戦闘を始めていた。那覇到着後、三池少

佐は脚を負傷し、軍司令部から軍参謀の西野少佐と共に、小峰の壕内にいた海軍部隊に派遣され、六月中旬この部隊が太田少将を始めここで全滅したのと行動を共にした。）

ひとまず戦闘の終息した慶留間島に、四月九日の夜、部隊長の命令を受けた第二中隊の特幹の吉屋が、海峡を泳いで一中隊のいた海岸に渡り、生存者を探し廻った。

このときの彼の行動も記録に値するものだろう。

四月の九日、私は中隊長に呼ばれた。本部の判断によれば、慶留間島には生存者がいる様子なので、その確認のため二中隊から適任者一名を選び、偵察させよ、という部隊長命令に基き、私を指名するというのであった。

一瞬その使命の重大さに緊張感が全身に流れたが、アメリカ軍上陸のとき、篠崎が泳いで行ったのだ、俺も覚悟をきめようと決意した。

夜を待って部落の海岸に降り、砂浜で褌一つになり旗を腹に巻き、護身用にも自決用にもと拳銃をそこに突っ込んだ。

まだ水は冷たく。近くには飛行機と魚雷艇が一隻碇泊しており、音を殺してその間を泳ぐと、時々飛行艇の窓から海面に向けた電灯の光が、その近くを明るくしたが、それが近づくと潜り、無事海峡は渡りきった。

この島には戦闘前に一、二度来たことがあったが、夜のため場所の関係は殆ど判断がつかず。一中隊の仲間がいた海岸の丸太小屋も、焼き尽くされていて見当がつかなかった。

しかし足許に目をこらすと、山に登る小道のあるのが判ったので、周りの闇に向って小声で「おい、一中隊」と呼んでみたが、しんとして何の音もない。

山の上の方かも知れん、とこの急な坂を登ると、その中途の草むらに四角いものが転がっていた。拾い上げてすかしてみると、アメリカ兵のKレーションの空箱で、”やはりこの辺には来たのだな”と思うと、緊張はしたが。人影や人の声は全くなかった。

頂上近くまで登ると、地上二、三十センチにピアノ線が張ってあり、ここはアメリカ軍の陣地の跡と思われたが、ここにも全く人の気配はない。

堀割になった峠を越え、下りの道を少し歩いた時、急に斜め下の慶留間の部落と思われる辺りに、灯りが点々と見えた。

”おう、やはり敵はいるのだ”

突っ立ってその灯りを眺めたが、任務は敵情の偵察ではなく、味方の生存者を見つけることなのだ、いるとすれば部落の近くではなく。やはり山か谷に違いないと考え、灯火を右に見ながら左に東側の山の方向への小道を歩いた。

しばらく行くとやや広い樹木のない斜面に出た。目をこらすとそこに凹字型の穴が三つ四つあり、アメリカ軍の機銃か迫撃砲陣地の跡らしい。

陣地があった近くには、誰もいる筈はなかろうと、この道を阿嘉島側の海岸に出るため、部落を背に斜面を登った。

斜面の中程に、何かは判らぬが大きな木が一本四方に枝を張っているので、その下で少し休もうかと近づくと、風に乗って急に屍臭が漂って来た。

山羊の死骸でもあるのかと、近ずいて闇に目をこらすと、根方に兵隊の服装の死体が十人程散らばっていた。

近寄れぬ程に屍臭が漂い、野鼠が腐りかけた死体をかじるのか。カサカサと音がし、鉄帽が風のために時々カラカラと音を立てた。

このとき、始めて鳥肌立つ恐怖感が全身を走った。

その死骸に追われる思いで、急いで島の中央の高地に向かって草むらに分け入り、ここで北の方角を見ると、阿嘉島の山形が薄黒く空に見えた。これで方角は大体見当がついたので、もう一度海岸を廻ることにした。

急に疲れが出て、少し休むつもりで腰を下ろすと、たまらなく眠気が出て夢を見た。何人か隊列になって兵隊達が歩いている。

自分一人取り残されどんどん離れて行く、たまらなく不安になった時、母が耳許で「お前、一人だけこんな所にいちゃいけないよ、早く立たなくちゃ」と呼びかけた。そうだ”と眼が覚めると、四月の夜風は裸にはまだ寒かった。

残っていれば、一番可能性のあるのはやはり一中隊の丸太小屋のあった海岸だろう、そこをもう一度探してみよう、と先程登った高地の堀割の道に出、坂を下った。

坂の三合目くらいまで下った時、すさまじい屍臭と混じって硝煙の臭いが下から吹き上げて来た。

”ああ、これでは駄目だ”もう慶留間の全員が戦死していると思った。

夜明けに近いらしく周囲は白み始めてきたので、そろそろ阿嘉に帰らねば、と海岸に向かって歩き出した時、足許の草むらが左右に分けられているのを見た。

”おや、これは何か通った跡のようだ、先に何かあるのかも知れんが、これを探すことで最後にしよう”と、それを辿って百メートルも歩くと、僅かな窪地に連なっている。その隅の方に、長い草が垂れ下っているのが見えた。

”誰かいる！”

昂ぶる声を抑えながら、隊の合言葉とされている「いちにん」と口にした時、横から手榴弾を握りしめた人影がとび出して来た。

基地隊の兵隊であった。

こうして。夜明け寸前にようやく中野軍曹ら基地隊、水勤隊の生存者を探し出し、この報告に基いて、翌々日第二中隊の宮下少尉が指揮者となって救出作業が行なわれ、阿嘉島に収容された。

この時軍属の一部には、自らの意思で慶留間に残った者がいた、ということである。

以後、五月下旬までの間、大下少尉とその他の者の行動を明らかにする記録はないが、諸種の資料から推測すると那覇の近くの高安の壕を本拠として首里の辺りまで行動していた可能性がある。大下少尉は二月から本島に移っていた基地第二大隊の本部や連絡所（当時津嘉山にあった）には、度々連絡のため顔を見せ、特にそこの水谷中尉（南部で戦死）とはよく話をしていたということである。

後に、私（儀同）が屋嘉の収容所に入ったとき、篠崎ら慶良間から来たという特幹が、首里の近辺で元気に動き廻っておられるのを見た、と話してくれた兵隊がいた。

五月下旬になると、大下少尉らの行動は、防衛庁戦史資料室で出した「沖縄方面陸軍作戦」の記載と、他の資料を綜合すると次のようになってくる。

大下少尉らは、同じ水上特攻第二九戦隊の相馬少尉（陸士五七期で大下少尉と同期）らと共に、ニヶ中隊に編成されて、船舶工兵第二六連隊第二大隊長の甘蔗大成大尉の指揮を受けることになり。この大隊は第二四師団「山部隊」の第八九連隊（連隊長は金山　均大佐）第三大隊に臨時編成され、国場川の近辺から五月下旬に、与那原の西、与那覇部落北側にある宮城部落方面に移動し、与那原方面から進攻して来るアメリカ軍に対する防衛陣地についた。

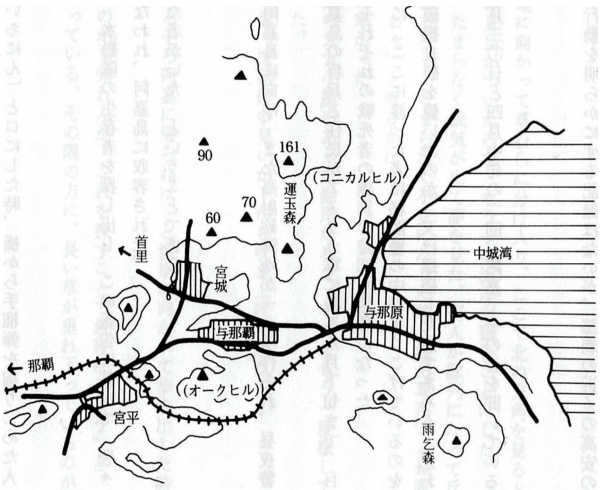
この地区で最も目標となる与那原の西北方の運玉森（海抜一六一メートル、アメリカ軍はコニカル・ヒルと呼んだ）と、その西五〇〇メートルの所にある六六・八高地が、八九連隊の本部や主力部隊の陣地となっていた。

ここでの戦闘の大まかな推移は次のとおりである。

五月二三日、アメリカ軍は中城湾からの艦砲射撃で、運玉森の同湾側の陣地を制圧し、日本軍が裏斜面に退いている隙をねらって、与那原及び古堅部落に進出を始めた。

この攻勢に対して、八九連隊と海軍部隊から救援に廻されて来た勝田大隊、これに独立二七大隊（海上挺進基地第二七大隊を改編した部隊）が、アメリカ軍の西方進出を一時阻止したが、その夜与那原にあるア

メリカ軍陣地を夜襲して失敗し。兵員に大きな損害を出した。



この防衛線が破られると、与那原―那覇街道を津嘉山方面まで一挙に進入されることになり。軍司令部のある首里陣地は。南部の後方部隊と遮断され包囲されることになってしまう。この重大な局面に対応して、軍司令部は更に津嘉山にいた海軍の守備隊、軍砲兵団のうちの一ヶ大隊、電信第三六連隊の一ヶ中隊。第二歩兵隊第三大隊のうちの約一〇〇名、合わせて数百をこの方面の増援に廻し、二四師団の指揮下に入れた。

この間にも与那覇付近の守備陣地は、猛烈な攻撃を受け二五日までに二九戦隊の相馬少尉以下二九名の戦死者を出している。

アメリカ軍側の記録によれば、”与那覇部落の高い丘オーク・ヒルと名付けていたが、アメリカ軍の第三二連隊は五月二三日から二六日にかけての戦闘で、日本軍の防衛線の前面で釘付けされ、前進は困難であった”

としており、日本軍もよく戦ったことを認めている。

西側の那覇地区には、既にアメリカ軍が侵入しており、東部でもこうした防衛線の維持が困難になったので、軍司令部は首里から撤退し、島尻南部に戦線を整理し持久戦を続ける方針になり、五月二八日に二四師団司令部からその指揮下にある各隊へ撤退命令が伝達された。

大下少尉らが属している甘蔗大隊は、師団の撤退に当って主力が完全に撤退するまで守備し。その完了後最後に撤退する。残置大隊”を命ぜられ、宮城部落からその西方にある宮平部落北側の高地に移動して、阻止陣地を敷いた。

二四師団では本部を中心とする主要部隊が、二九日から撤退を開始した。残置部隊は六月一日まで指定陣地を保持した後、東風平を経て与座付近に後退集結するよう指示されており、その任を果たして予定どおり撤退を完了した。

この情況について、アメリカ軍側の記録によれば、

”この方面では守備隊最後の抵抗線で、二、三日日本軍の決死的行為もあるにはあったが、進撃は迅速に展開した。五月三〇日と三一日には、第三二連隊は首里に向かって順調に進撃した。

五月三〇日は雨の中を積極的に攻撃を始め、その日の暮までには与那覇部落と福原、当間部落を結ぶ一帯の丘陵宮平東側高地を占領した

とされてあり。日本側の記録と日付が二日ほどずれてはいるか、この東側海岸からの撤退も、”戦闘より手こずった”とアメリカ側の言った降り続く雨の中の出来事で、大下少尉らも雨にうたれながら、歩いて東風平へ、そして最後の地となる与座嶽へと撤退したのであった。

与座嶽到着後、大下少尉らは二四師団第八九連隊の指揮下のまま、それが防備する与座部落及び与座嶽付近に配備された。

与座嶽は海抜一六七メートル、東方に一五五メートルの八重瀬嶽、その中間南方に一五八メートルの高地がある。北側は絶壁に近い急な断崖をなし、南はなだらかな斜面の、守備には好適な天然の要塞である。

北側平地部には、高良。与座。大里の部落が点在し、西側は急斜面となっており、谷を隔てて国吉台地がある。

与座嶽と同じ高台を為している八重瀬嶽は、独立混成四四旅団の主陣地となり、その中間の斜面には平賀少佐が指揮する船舶関係の残存兵を含めた特設連隊も配置された。

アメリカ軍側記録（第二次世界大戦ブックス「沖縄」）には、

”アメリカ第七歩兵師団の前面にいた日本軍は、与座嶽を守るベテラン達に比べると劣っていた。これらは船舶工兵や海上挺進隊、臼砲部隊それに兵站部隊など雑多な部隊から来たもので、臨時に歩兵連隊に編成されて第四四旅団の戦線に加えられていたものであった”とあり、大下少尉らは八九連隊長の指揮下ではあるが、その混成部隊は与座嶽と八重瀬嶽の中間地点にいたもの。と推認される。

以後沖縄戦での終末期を迎えたここでの戦闘の中で、大下少尉らに関する具体的な記録はなく、この与座嶽の近辺で潰滅状態になった日本軍の全体的情況の記録の中から。大下中隊長等ノ戦死した六月二十日迄の状態を推測してみるに過ぎない。

その資料として与座嶽周辺で展開された戦闘情況を、双方の記録の中から拾うこととする。

まず日本側のものとして、「沖縄方面陸軍作戦」の記録を要約する。

六月一〇日、二四師団正面に本格的な攻撃が始まり、アメリカ軍は与座部落付近に進出して来た。

一二日に国吉台地北側の一角が占拠された。

一三日。与座嶽及び西方の大里部落では終始激戦が展開され、八九連隊はアメリカ軍に多大な損害を与えたが、大里部落には一部アメリカ軍が進出して来た。

一四日、与座嶽及び大里付近は、アメリカ軍の猛攻を受けたが、与座嶽及び西方高地は終日確保できた。この日国吉台地は背後から攻撃を受ける情勢になった。

一五日、八重瀬嶽と与座嶽の中間を占拠していた八九連隊第一大隊は、一四日に八重瀬嶽がアメリカ軍に陥されたことにより、戦車を伴うアメリカ軍歩兵部隊に突破されるに至った。

軍司令部は、急遽歩兵二二連隊第三大隊の一ヶ中隊を、八九連隊の指揮下に入れるよう指示したが、既に西の堡塁となっていた国吉台地の方面でもアメリカ軍に馬乗り攻撃を受ける情況になった。

一六日夕方、与座嶽はアメリカ軍に占領され、八九連隊は反対斜面でなお奮闘を続けた。

一七日、与座嶽及び大里付近の残存部隊は頑強な抵抗を続けたが、兵員は逐次死傷し、アメリカ軍は一挙に新垣北方高地、真栄平東方高地まで進出した。

八原博通氏の「沖縄決戦」（読売新聞社）

敵第七師団は東方より八重瀬嶽の完全攻略を図ると共に、更に北方より八重瀬。与座両高地の中間部断崖の比較的緩やかな部分から、滲透攻撃を開始した。

歩兵八九連隊捜索二四連隊及び工兵第二四連隊などの第二四師団諸隊は、北方及び東南両方面より挟撃されて、その奮闘にもかかわらず、六月一七日には与座嶽の山頂は敵手に落ちてしまった。

次にアメリカ側の資料として、

まず第二次世界大戦ブックス「沖縄」

一三日、日本の歩兵第八九連隊は増援を受け、なお与座嶽を死守していたけれども、その側面と後方は、八重瀬嶽の南にアメリカ第一〇軍の部隊の侵入がさし迫っていることに脅されて来た。

第四四旅団の最後の歩兵部隊との連絡は全くとだえてしまい、部隊の統制はつかなくなった。

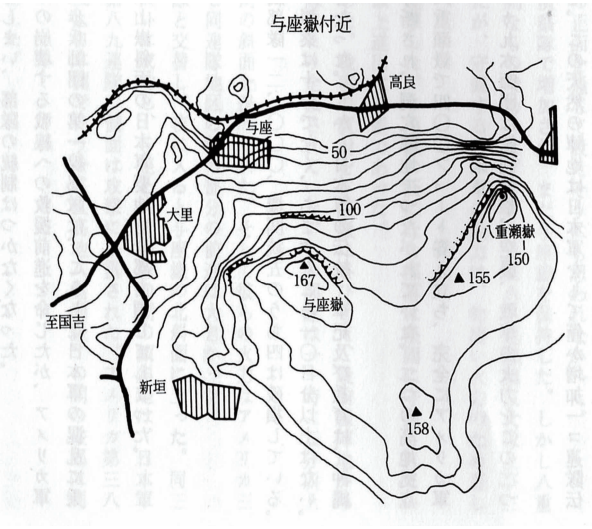
軍司令部は第六二師団に対し、真壁南西の位置からこの崩壊する戦線への救援前進を命じたが、アメリカ軍の砲爆撃はこの展開を完全に妨害した。アメリカ第九六歩兵師団の第一線部隊は、こうした日本軍の混乱に乗じて与座嶽の一帯を突破した。

六月一七日の日没までに、第二四軍団の第一線連隊は山嶽斜面の日本軍要地を全部占領してしまった。

アメリカ海兵隊「太平洋の勝利」

六月四日十分に配置を終った日本の第二四師団と配属部隊一二、〇〇〇、機関銃五のうち四は破損している。

歩兵砲や補給はゼロに近い。砲は無事後退しているが、弾薬は十分でなく、あますところ一〇日分以上はない。



第三二軍は今や断末魔となってその破滅は時の問題となった。しかし日本軍の伝統、軍紀及び教育は、沖縄戦の集結までは最後まで人対人の戦闘が予想された。

頂上が断崖となっている台地は、珊瑚と岩で二つに分断され、洞穴陣地でつながれていた。二つの高地拠点は一つの与座嶽であり三四〇フィート屹立し、今一つ八重瀬嶽で四〇〇フィート聳え立ち、完全にアメリカ軍前進地区を見下ろしていた。

六月九日、アメリカ軍の軍団攻勢が開始され、アメリカ九六師団は艦砲射撃、空襲。戦車の火力をこの二つに集中し、終日高地線の攻撃を続けた。日本の二四師団は与座嶽を含む残余の高地を守備した。この天然の陣地は日本軍をして僅か増加一ヶ連隊伝統の古い日本第八九連隊をして、よくアメリカ第九六海兵師団の攻撃を阻止することを可能にした。

六月一三日与座はアメリカ三八一歩兵連隊の第二大隊によって午前中に占領され、高地陣地は部落より南が占領された。敵の抵抗の猛烈さは、日本の第八九連隊の正面を通じて衰えそうにも思われなかった。

一二日から一三日にかけ、日本の八九連隊は第二四偵察隊で増加され、まだ与座嶽を保持した。しかし八重瀬嶽の南の突破のための後方及び右翼側への危険は深刻なものであった。アメリカ三八三連隊第三大隊及び三八一連隊第二大隊は、頂上を極めることはできなかったが、守備する日本軍の兵力は、物凄い火力のため著しく減殺された。

アメリカ三八三連隊第一大隊は大里に向かって南に進撃した。与座嶽の蔭になる部落は堅固に守備されていたが、激戦の後占領された。しかし地雷原のためそれ以上進出は不能であった。

六月一四日、同大隊は大里を掃蕩し、地雷原を清掃した。戦車の直射を与座嶽に浴びせて、最前線陣地から後退した。守備兵の残余はこの日の中に同連隊第三大隊により全滅されていた。この部隊は一一時二五分頂上を占領し、更に南斜面に突進した。

日本軍の第八九連隊は依然六月一五日与座嶽の北と南の斜面を保っていた。そして彼らの火力はアメリカ三八三連隊第一大隊の大里以南への前進を妨げた。しかし同連隊地区の他の部分の前進は大きかった。

アメリカ三八二連隊第二大隊は与座郊外で同第三大隊と交替し、夜に入ると与座嶽の北斜面に上った。同三八一連隊歩兵と三八三連隊の左大隊第三大隊の攻撃は大いに成功し、与座と八重瀬嶽の間の傾斜地は。日本軍が「最強の陣地」と誇っていたが奪取されて、日本の第八九連隊の側面は攻撃

に暴露された。アメリカ第三八一連隊歩兵は六〇〇ヤード前進し、与座嶽と高地一五三（日本側でいう一五五高地八重瀬嶽）の間の鞍部に到着した。

六月一七日の攻撃により一五三高地の山頂は遂に陥落した。

与座―大里―与座嶽地区における日本軍の組織的抵抗は、六月一七日アメリカ第三八二連隊歩兵によって潰滅された。夕方までに同第二四軍団は与座嶽―八重瀬嶽傾斜地における高地全部を支配した。

その前線と島の南海岸との間は、日本の第六二師団、第四四旅団及び第八九連隊からの部隊や兵で大混乱していた。その大部分はなお沖縄第三二軍司令部を防護しようとする無駄な考えで、死を決していた者達だった。

この頃同じ与座嶽で、彼らと最も近い場所にいたと思われる船舶工兵二六連隊からの生還者、野村正起氏の「沖縄線敗兵日記」には、六月二一日の出来事として次のように書かれている。

「午後二時頃、熾烈をきわめた砲弾が。ようやく途絶えた。嵐の後さながらの静けさを破って、アメリカ機の飛翔音が耳を圧して迫り、壕の上を執拗に旋回し、そして遠離った。……と突然『敵戦車来襲』と監視哨の一人が壕内に駆け込んできて叫んだ。壕内は騒然となった。（中略）

そのとき、急造爆雷を背負った戦車特攻兵数名が、つぎつぎと二人の右手を駆け抜け、右前方の視野にある松林の中に消え去った、銃弾が二人の身辺をかすめ、盛んに土煙をあげていた。（中略）

夜に入って、砲撃はますます熾烈になった。壕内は震動のために土砂が崩れ、しきりに灯が揺らいでいる、

もう一歩も外に出ることは不可能である。給水の道は断たれた。壕壁の水滴を飯盒に受ける者が見える。絶望的な兵士の溜息が、そこかしこに聞こえ、能面のようなうつろな顔が点滅する灯火のもとに浮かんでいる。」

六月二二日

「コンッ、コンッと、なにかを地に打ち込むような音が響いてきた。北の壕入口らしかった。皆、異様に顔を見合わせていた。

……突如、ズーン！ と轟音が壕内を震動さして、ドッと爆風が流れてきた。灯りは消えてあたりは闇になった。いち早く、焦げ臭い匂いが鼻をついた。息づまるようなうめき声が、二声、三声、北の入口付近でした。

敵は壕の入口に爆雷をしかけて、日本兵を生き埋めにするつもりだ。（中略）

付近には、足の踏場もないほどに日本兵の死体が転がっていた。前方のちぎれた杉の梢に、十一夜ほどの月が懸かって、荒涼たる周辺の地上を照らしていた。静かであった。昨日までのあの轟々たる砲声は絶えて、もうどこにも戦っている気配はなかった。わたしも馳平も、続いて出て来た中隊の兵士たちも、皆。茫然とたたずんでいた。」

以上に表現されている戦況で、多少の差はみられるが、アメリカ軍は六月一七日に与座嶽の頂上の台地を突破し、二〇日頃には更に南部まで一挙に進出して行った。従って記録にあるとおりとすれば、与座嶽の斜面にいた大下少尉らは、一七日以降は敵中に孤立したことになり、六月二〇日大下少尉以下一三名（帆足・篠崎を含む）は、この混乱した戦場の中で戦死したものとなる。

なお、沖縄軍の最後は 六月二十三日

第三十二軍司令官　牛島　満中将

同　　参謀長　長　勇中将

沖縄本島　摩文仁洞窟にて割腹自殺。

をもって第三十二軍の事実上の終焉となります。

連載山ある記４　埼玉県「棒の嶺」

会員　池田　康博

奥武蔵と奥多摩周辺の未踏の山から「棒の嶺」を選んで、新緑も爽やかな5月初旬に登った。

棒の嶺は、埼玉県飯能市と東京都西多摩郡奥多摩町の境界に位置する標高九百六十九mの山である。名栗湖の白谷沢から登る場合は、西武鉄道の飯能駅からバスで名栗温泉「さわらびの湯」バス停まで行くことになるが、今回は車で行ったので、さわらびの湯の無料駐車場に止めた。

8時40分、山頂を目指して駐車場を出発した。しばらく車道を登って名栗湖に着いたら、ダムの堰提を通ってさらに進み、9時5分、白谷沢登山口に着いた。このコースは沢沿いの登りで、沢の涼しい風を感じながら、また、幾筋もの滝を見ながら、そして、何度も沢を渡り返しながら登って行く。圧巻は、切り立った岸壁に挟まれた峡谷部の景観とそれに続く鎖場のスリルであった。足を踏み外さぬように慎重に、一方で景色を楽しみながら登って行った。

ここを過ぎるとしばらく普通の山道で、巨大な岩茸石のある十字路に出たら尾根道となり、今度は尾根を渡る涼風を受けながら頂上へ急坂を登って行く。そして、10時55分、山頂に到着した。

白谷沢の峡谷部

山頂は広々として東屋もある。しかし、展望は北側のみで、しかも生憎この日は、赤城山など遠方の峰々は霞んでいたが、近くは東京の平野部、西武球場とおぼしきドームから、左へぐるっと武甲山まで一望できた。

ゆっくり休憩、昼食を取り、12時に下山開始、来た道を返すが、岩茸石からは登ってきた道を左に見て真っ直ぐ、滝ノ平尾根をひたすら下って13時45分、無事駐車場に着いた。

山頂からの眺め

中村　五郎
最年少の生き残り特攻隊員

金子　敬志

選抜され、特攻訓練中に終戦を迎えられた最年少の生き残り特攻隊員　中村五郎氏に貴重なお話をお伺いしましたので紹介します。

中村氏は昭和４年３月28日生まれで今年89才を迎えられました。

中村五郎氏

昭和18年12月、陸軍特別幹部候補生第１期生（操縦）に合格　昭和19年３月末、大刀洗飛行学校に入校し４月から７月末まで地上準備教育を受けました。その後、朝鮮半島の大田（たいでん、現在の韓国テジョン）で基本操縦訓練、京城（けいじょう、現在の韓国ソウル）で錬成訓練を受けました。

昭和20年５月、京城で特攻隊員に指名され、その後、海州で特攻訓練・待機中に８月の終戦を迎えました。生き残りの特攻隊員としては最年少となります。

５才年上の実兄陸軍少年飛行兵13期中村健三少尉は、昭和20年１月６日　旭光隊として出撃、ルソン島西方で特攻戦死されています。

以下、質問とその回答

一　特攻隊員は希望の有無の確認はありましたか。

１回、全員を対象に尋ねられたように記憶している。

二　京城で特攻隊員に指名されましたが、どんなお気持ちでしたか

京城での第１選抜だった。指名された時、死ぬことについて恐れはなかった。

それが当たり前と思っていた。当時はそれが最高の名誉と思っていた。

三　特攻隊の隊名はありましたか。

振武４１４飛行隊（斎藤隊）、隊員は、隊長が特操１期生（特操：特別操縦見習士官）特操３期生２名、特幹２名で５機編成であった。。

四　使用機は何ですか。

戦争末期で飛行機がなく95式２型中間練習機を使った。今考えるとひどい話で自殺行為だと思う。

訓練は、高度１２００メートルから50メートルくらいまで角度60度で急降下が主だった。「浮き上がってくるので、絶対に最後まで操縦桿を離すな。」また「目をつぶるな。」と言われた。

初めは地上にT字板を置き目標にしたが、後には、海上に浮かんだ実際の船を目標にした。その他、高度30～50メートル位の超低空飛行を行ったり、進撃途中の経路を想定した山岳地帯の山あいを編隊で飛行する、などの訓練を実施した。

五　昭和20年５月頃は、陸軍と海軍が協同して沖縄特攻作戦を行っていましたが、その事についてご存じでしたか。

説明もなく知らなかった。

六　天候不良や機材の不良により帰投することについての指示はありましたか。

指示はなかった。

七　戦後も含めて「振武寮」についてお聞きになった事はございますか。

聞いていない。

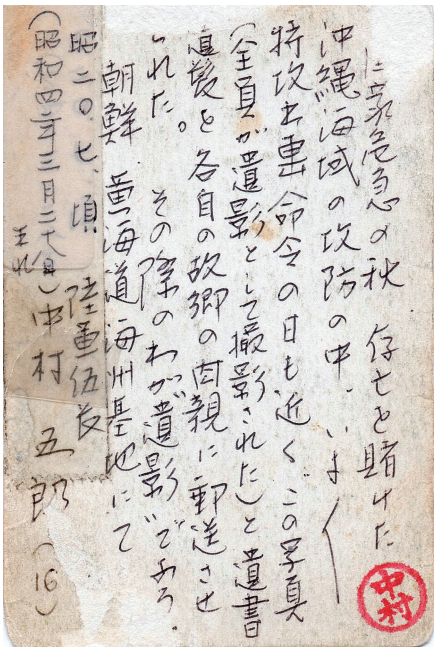
八　お兄様が特攻隊員となった事、また特攻戦死された事を何時お知りになりましたか。

復員してから父に聞いた。

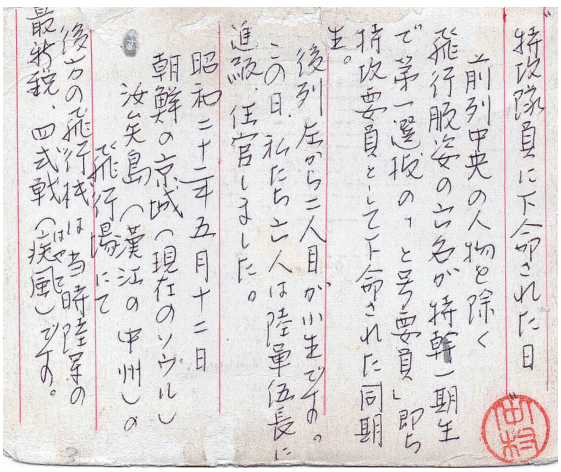
9　特攻についてどう思いますか。

当時は若く純真だったので当然と思っていたが、今になって考えると、とに角ひどい事をしたものだと思う。

10　終戦の日（昭和20年８月15日）私たちは出撃数日前で余命は数日に迫っていた。



辞世の句
君が為何か惜しまむ若櫻
散りて甲斐ある命なりせば


特攻隊員に下命された日
前列中央の人物を除く
飛行服姿の六名が特攻一期生
で第一選抜の「と号要員」即ち
特攻要員として下命された同期
生。
後列左から二人目が小生で
この日、私たち六人は陸軍伍長に
進級、任官しました。
昭和二十二年五月十二日
朝鮮の京城(現在のソウル)
汝矣島(漢江の中州)の
飛行場にて
後方の飛行機は当時陸軍の
最新鋭、四式戦(疾風)です。

中村氏より５歳年上の中村健三少尉
旭光隊として出撃、昭和２０年１月６日
フィリッピンルソン島西方で特攻戦死
大正１３年生７月生まれ。
第１３期陸軍少年飛行兵出身（当時20歳）

写真提供：中村五郎氏

特攻文芸

俳句

征く君に　想いをはせし　長き夜

淳

短歌

想いのせ　天まで跳ねよ　雪うさぎ
君のところに　とどくよに

淳　子

川柳

冴え渡る秋の空ゆく赤とんぼ

松茸を喰らいくしゃくしゃ皺となる

渡り鳥翔ぶ夕空のいわし雲

井下駄マスオ

特攻文芸への投稿をお待ちしています。
FAX 03-5213-4596　Eメール：tokuseniken@tokkotai.or.jp　又はホームページの「皆様の声」からでも結構です。
会員番号、氏名を明記、作品は未発表のオリジナルのみ。

事務局からの報告等

会員の吹野昇治様から次のようなお問い合わせがありました。

重巡洋艦ルイスビルへの特攻について

会員の吹野　昇治（ふきの・しょうじ）と申します。毎年慰霊祭に参加させて頂いております。

私は海軍飛行予備学生十三期・吹野匡（ただす）（昭和二十年一月六日　旭日隊として比島特攻）の遺族・甥にあたります。

長年特攻結果は不明でしたが、各マスコミ・著者の皆様のお力により詳細が次第に判って参りました。

日本テレビのアメリカでの発見や「つばさのかけら」（児童文学・日野多香子先生）の記述、特に戦史研究家・菅原完先生の驚異的な日米調査・分析による「知られざる太平洋戦争秘話」（文庫本）などで。

「一月六日、マバラカットを旭日隊（彗星１機２名）で出撃、リンガエン湾で第七七・二任務群の旗艦・重巡ルイスビルの信号艦橋に特攻命中、大破・戦線離脱させる。」

この時の機体の一部を乗組員が持ち帰り、今なおアメリカの自宅にあり、残されていた機体番号から「吹野匡中尉、三宅精策少尉」機と判明した稀有な例です。

実は今回はこの件ではなくて、前日（昭和二十年一月五日）に、同じくルイスビルに特攻命中！の件でのお願いです。

１月５日17時３分、陸軍の特攻機・九九式襲撃機１機が同じルイスビルの２番砲塔に命中（１名戦死、ヒックス艦長以下58名負傷）２番砲塔を大破させ、翌１月６日のルソン島砲撃は残りの１番・３番砲塔で実施を余儀なくさせました。

各資料、各本をまとめただけの素人調査ですが、同日、共にクラーク飛行場を発進し、ルソン島西方海域での特攻を行った九九式襲撃機４機で、搭乗員は次のとおりです。

順不同

石腸隊（３機３名）―　細田吉夫中尉、杉町研介、林甲子郎少尉

進龍隊（１機１名）―　庄村覚太郎軍曹

この４機のどれか１機が、ルイスビルに特攻命中したと思われます。

この機は、巧みに駆逐艦の陰に隠れて接敵。同士討ちの恐れありで、対空射撃できず！ルイスビル千メートルの位置からダイブ、胴体から炎を出し炎上しながら、第二砲塔へ特攻命中！となっております。

この陸軍機の所属、お名前、情報などが判れば、同じ遺族として喜ばしく思います。

共に旗艦・重巡ルイスビルに、２日連続で特攻命中。ルイスビルはこのため戦線離脱・本国へ帰り、ルイスビルの戦争は終わりました。

勝手な事を書きましたが、陸軍機・九九式襲撃機特攻４名の方々、そして多くの特攻散華した英霊の方々へ、心より追悼致します。いつまでも日本国民は、忘れずに称えて行きたいと思います。

顕彰会の皆様のお力添えに深く感謝致します。

ありがとうございました。

黙祷　　合掌　　吹野　昇治

事務局より

吹野様のお問合せについて顕彰会の保有する資料を調べてみましたが、残念ながら答えを見つける事は出来ませんでした。

情報等をお持ちでしたら特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局までお知らせ頂ければ幸いです。

〒１０２－００７３
東京都千代田区九段北３－１－１
靖國神社遊就館内
公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３－５２１３－４５９４
ＦＡＸ０３－５２１３－４５９６
E-mail tokuseniken@tokkotai.or.jp

寄付者御芳名（敬称略）

（平成30年7月1日～9月30日）

（単位千円）

一〇〇　呉　菜々子
三一　松澤　健
一〇　粕井　隆
一〇〇　舘元　勳武
一〇〇　市川　雄一
一〇〇　大穂　利武
一〇　井川　嘉江
七　沖　周治
七　阿部　敏行
七　早田　亮彦
七　菅原　春生
七　田中　清
七　氏家　康宇
七　臼田　智子
七　川床　剛士
七　服部　義隆
五　黒田　博
五　古屋　七郎
五　植田　和男
五　堀江　正夫
五　上野むつ子
五　湯澤　一枝
五　鮫島美知子
四　高橋こすみ
三　下森　康玄
三　清水　典郎
三　野俣　明
三　岡本　久吉
三　森山　敏明
二　深山　明敏
二　今井　敏
二　安藤佐智子
二　岩崎　昭男
二　松井　鈴子
二　工藤　重民
二　佐藤　義信
二　吉田　治正
二　水町　博勝
二　山口　高治
二　加藤　拓
二　肥田木多恵子
二　河島　慶明
二　箕輪　敏
二　岡嵜　幸平
二　中島　尚史
二　寺井　俊一
一　平野　勝也
一　長谷川知幸
一　松田　栄
一　渡辺　由佳
一　田中　郁子
三　早瀬　登
二　酒井　陽太
二　丸原　巧
二　衣笠　陽雄
二　根本　紘一
二　山口　照夫
二　川井　孝輔
二　小島　啓三
二　川田久四郎
二　呉　正男
二　正本　禎亮
二　小倉　利之
二　橋口　俊一
二　日高　誠
二　柴田沙矢香
二　小原真知子
二　川辺　三郎
二　酒寄　和郎
一　木下　矩武
一　渡辺　里佳
一　青木　義博
一　安藤　愿英
一〇〇　山根　秋男
一四　降矢　達男
一〇　千葉　孝
一〇〇　百目鬼　清
一〇〇　鈴木　敏生
一〇　香川　省
七　千　玄室
七　杉原　清之
七　萩原　健一
七　大澤　和久
七　竹本　佳徳
七　小堀圭一郎
七　服部　武志
七　内山　正義
六　原　照寿
五　續木　夏樹
五　林　佐吉
五　丸　利郎
五　荒垣　外司
五　近藤　敬子
五　田辺さだ子
五　棟久　律子
四　江守　聖学
三　波多野義昭
三　古閑カツ子
三　北村菜穂子
三　吉野　信二
三　森山　敏明
二　酒井　陽太
二　丸原　巧
二　衣笠　陽雄
二　根本　紘一
二　山口　照夫
二　川井　孝輔
二　小島　啓三
二　川田久四郎
二　呉　正男
二　正本　禎亮
二　小倉　利之
二　橋口　俊一
二　日高　誠
二　柴田沙矢香
二　小原真知子
二　川辺　三郎
二　酒寄　和郎
一　木下　矩武
一　渡辺　里佳
一　青木　義博
一　安藤　愿英
一　田中　郁子
一　渡辺　由佳
一　松田　栄
一　長谷川知幸
一　平野　勝也
二　寺井　俊一
二　岡嵜　幸平
二　中島　尚史
二　内山　正義
二　服部　武志
二　臼田　智子
二　箕輪　敏
二　河島　慶明
二　肥田木多恵子
二　加藤　拓
二　山口　高治
二　吉田　治正
二　佐藤　義信
二　工藤　重民
二　松井　鈴子
二　岩崎　昭男
二　安藤佐智子
二　今井　敏
二　深山　明敏
二　丸原　巧
二　衣笠　陽雄
二　根本　紘一
二　山口　照夫
二　川井　孝輔
二　小島　啓三
二　川田久四郎
二　呉　正男
二　正本　禎亮
二　小倉　利之
二　橋口　俊一
二　日高　誠
二　柴田沙矢香
二　小原真知子
二　川辺　三郎
二　酒寄　和郎
一　木下　矩武
一　渡辺　里佳
一　青木　義博
一　安藤　愿英
一　田中　郁子
一　渡辺　由佳
一　松田　栄
一　長谷川知幸
一　平野　勝也
二　寺井　俊一
二　岡嵜　幸平
二　中島　尚史
二　内山　正義
二　服部　武志
二　臼田　智子
二　箕輪　敏
二　河島　慶明
二　肥田木多恵子
二　加藤　拓
二　山口　高治
二　吉田　治正
二　佐藤　義信
二　工藤　重民
二　松井　鈴子
二　岩崎　昭男
二　安藤佐智子
二　今井　敏
二　深山　明敏
二　丸原　巧
二　衣笠　陽雄
二　根本　紘一
二　山口　照夫
二　川井　孝輔
二　小島　啓三
二　川田久四郎
二　呉　正男
二　正本　禎亮
二　小倉　利之
二　橋口　俊一
二　日高　誠
二　柴田沙矢香
二　小原真知子
二　川辺　三郎
二　酒寄　和郎
一　木下　矩武
一　渡辺　里佳
一　青木　義博
一　安藤　愿英
一　田中　郁子
一　渡辺　由佳
一　松田　栄
一　長谷川知幸
一　平野　勝也
二　寺井　俊一
二　岡嵜　幸平
二　中島　尚史
二　内山　正義
二　服部　武志
二　臼田　智子
二　箕輪　敏
二　河島　慶明
二　肥田木多恵子
二　加藤　拓
二　山口　高治
二　吉田　治正
二　佐藤　義信
二　工藤　重民
二　松井　鈴子
二　岩崎　昭男
二　安藤佐智子
二　今井　敏
二　深山　明敏
二　丸原　巧
二　衣笠　陽雄
二　根本　紘一
二　山口　照夫
二　川井　孝輔
二　小島　啓三
二　川田久四郎
二　呉　正男
二　正本　禎亮
二　小倉　利之
二　橋口　俊一
二　日高　誠
二　柴田沙矢香
二　小原真知子
二　川辺　三郎
二　酒寄　和郎
一　木下　矩武
一　渡辺　里佳
一　青木　義博
一　安藤　愿英

新入会員名簿（敬称略）

（平成30年7月1日～9月30日）

宮城　小笠原　優
秋田　川尻　孝紀
山形　中村　政孝
埼玉　吉田　文治
千葉　金井　澄男
東京　伊達　直哉
東京　古瀬　信久
東京　村上　亜依
東京　酒井　陽太
東京　速水　由香
長野　島田　雄樹
大阪　渥美　彩奈
山口　石川　忠祐
大分　野尻　敬生
宮崎　村永浩太郎
青森　大和　誠（30・2・19）
福島　手代木和之（30・5・2）
茨城　田中　直（30・7・20）
飯村新次郎（30・5・8）
群馬　林　藤太（29・10・28）
埼玉　渋谷　多平
千葉　関口　正孝（30・9・14）
東京　松本　司（29・12・5）
島村　靖子（30・1・5）
小林　義郎（30・2・24）
早川　正（30・3・2）
関根　雅美（30・2・5）
伊地知行輝（30・5・11）
愛知　谷　功（30・4・27）
大阪　藤井　常男（30・5・2）
福岡　神塚　正喜（30・5・2）
清水敬三郎
中島　和寛
大森　和弘
岩崎　順
平田　節男

会員訃報（敬称略）

「世田谷山観音寺月例法要」のご案内

毎月、戦没特攻隊員に対する感謝と慰霊の法要を行っています。どなたでもご参加できます。

日時　毎月18日午後２時より
場所　世田谷山観音寺
〒１５４-０００２
東京都世田谷区下馬４-９-４
ＴＥＬ　０３-３４１０-８８１１
ＦＡＸ　０３-３４１０-８８１２
内容　１　特攻観音堂に於ける法要
　　２　本坊に於ける直会
その他　御宝前（お布施）として、千円をお収め下さい。

会報『特攻』第１２１号正誤表　次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。
（訂正箇所）
22頁２段目
誤　藤本光男氏（90）
正　藤本光男氏（92）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　３０００円
・学生会員　１０００円

○　URL:http://www.tokkotai.or.jp
　ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

１　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

２　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

３　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

４　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

５　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７３
東京都千代田区九段北３-１-１
靖國神社遊就館内
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokuseniken@tokkotai.or.jp